

SSSS. DYNAZENON—RE: CODE

od—

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園祭の後も続く、つつがない日常。ガウマの去った街で通り過ぎる、祭りの後のお話。

※こちらの作品はpixivでも投稿しています(<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19663144>)

b e g i n n i n g	R E : C O D E	R E : C O D E	R E : C O D E	R E : C O D E	R E : C O D E	R E : C O D E	R E : C O D E	R E : C O D E	R E : C O D E	R E : C O D E	R E : C O D E	R E : C O D E	P r o l o g u e
	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
108	97	92	83	74	63	54	44	35	25	17	10	5	1

目
次

Prologue

河川敷を吹き抜ける風が頬を撫でると、今でも偶に、“あの人が”が通り過ぎた気がする。

南夢芽は振り返って、過ぎ去った川辺の景色と、もう上がることはなくなつた水門を目にする。つい三か月前までは頻繁に通つていた橋の下と合わせて、ここは、夢芽にとって大事な人が、二人もいなくなつた場所だつた。

別れ方もそれぞれ違うけど、二人を想つて思い出を見つめる。過去を振り切つて向き直れば、同級生の麻中蓬が側で待つてくれている。青い髪色とよく似たパーソナルカラーの水色のシャツ。傍目には私服にしか見えないけど、おおらかな校風には許された格好。共にフジヨキ台高校に通う者同士、肩を並べる。

「もういいの？」
急に立ち止まつたことに文句もつけず、蓬がそう言つてくれたのは、きつと同じ人を想つていたからで。

「うん。ありがとう」

お礼を返しながら、夢芽は蓬の方へ右手を寄せる。その意図を汲みつつ「流石に暑くない？」と蓬が苦笑した。学校まではまだ遠い。合理的に判断すれば、たぶん彼の方が正しいのだろう。登下校くらい手なんて繋がなくても——ほんのり朱に染まつた頬がそうモノ語っている。彼のそんな顔を引き出しただけでも、実は半分成功だつたりするのだけど、夢芽はそこで妥協しなかつた。

「蓬の手、ひんやりして丁度いいんだよ」

「ちよつと強引じゃない、それ？」

しょうがないなという風に折れて、蓬の手が夢芽の手に触れた。同性のそれとは異なる、肌馴染まない肌。夢芽と付き合いを始めてからは、ちよつとの小遣い稼ぎにまたバイトを増やしたらしい彼の掌は、働いている人のそれなのかなと思いはしても、同年代の異性を彼しか知らない夢芽にはその差異を確かめようもない。ただ、彼と手を

繋ぐことに段々と抵抗がなくなっていく寂しさと、彼が自然と当たり前
前に手を取ってくれるように振舞える日々の積み重ねが、夢芽には学
校よりも楽しみだった。「よく出来ました」冗談混じりに夢芽は言う。
「またそれ」くすぐったそうに蓬が言う。並んで一歩踏み出そうとし
て——あつ、と蓬が何かに目を留めて立ち止まった。

折角繋いだ手が離れていく。

土手の方へ駆け寄っていく蓬の背中を追う。草むらの斜面に屈み
込んで右手を伸ばすと、彼は所々薄汚れた白い帽子を取り上げた。人
の顔の様な形をした帽章をあしらった、夢芽にとっても見覚えある
物。

「それって、シズム君の」

「……あれからずっと、風に流されてたのかな」

土汚れを払いながら蓬が立ち上がる。忘れようもない転校生が置
いていった物を手にして見つめる彼の瞳には、言い様のない物悲しさ
が漂っていた。学園祭の日も、確かそんな顔をしていた。夢芽の知ら
ない蓬。ほんの少し遠く感じられた彼の後ろから、また風が吹いて、

「あ——」

舞い上がった帽子が、夏の日照りを受ける川面の方へ運ばれてい
く。

髪を押さえながら、夢芽は隣でそれを見ている。

川に落ちていった帽子の行方を見下ろして、蓬は暫くその場に立ち
尽くしていた。離れた感触を名残惜しむように彼は掌を見つめ、そん
な恋人の姿を、夢芽はほんの少し遠く感じた。

現在よりも、過去に後ろ髪を引かれた面持ち。その横顔に数カ月前
の自分を重ねて、夢芽はつい、強めの声調で呼び掛けた。

「蓬っ。……行く」

ハツと顔を上げて、彼は柔らかな笑顔を向けてくれた。繋ぎそびれ
た手はなんとなく、離れてそれっきり。蓬がそうしてくれたように、
自分も、彼の蟠りを解きたいと思う。横目に窺う彼の表情からは、既
に曇りは晴れている。今は彼の目が、過去よりも現在を向いてくれて
いるなら、それだけで。

「お花、さつきみたいに、風で飛ばないといいね」

「大丈夫でしょ。橋の下なんだから」

取り留めもない会話。道すがら置いてきたそれに思いを馳せて、何気ない今日は始まる。

晴天の下、人付き合いの増えたこの頃の憂鬱も忘れられる、かけがえのない人と歩く今朝のこと。

◇

橋の下の空き地には、くたびれたビニールシートや生活の跡が散乱する、人々に忘れ去られた棲み処がある。今し方少年と少女が何かを置いていったその場所を、野良猫は茂みから眺めている。

真つ白な毛並みの中、耳や頭の天辺だけは黒い斑模様をついた野良猫の記憶からは、ここに住み着いていた人間の顔は消えかかっている。けれどもここを縄張りにしていて誰かがいたことだけはその生活の気配からなんとなく察せられて、手付かずになったその聖域を覗きに來ることがままあった。

あの強面で細長い大男が、偶には帰ってくるかもしれない。

そうすれば、奴が寝ている間に餌にありつけることもあるかもしれない。涼みがてらの猫の知恵は功を奏して、別人ではあるが客人が土産を持ってきた。人氣が失せたのを見計らって猫は茂みを出る。石の斜面を舐める様に上る。あの強面が横になっていたスペースの真ん中には、真つ白な花束がお供えされていた。

猫は氣落ちせずその場に留まって丸くなる。蝉の音と真夏が終わりにかけた季節の節目。それでも過ごし易い場所を好むのは本能で、あいつはこんな抛り所を捨ててどこに行っただらうと、縄張りの主の匂いを嗅ぐ。消えかけていた記憶が蘇る。得体の知れない色で塗りたくられた、いかつい男の顔。

ふと、物音がした。

あのおっかない奴の足音だと思った。

風に泳いだ白い帽子が、草むらにぽつんと落ちていた。

猫はすぐさま興味を失う。日が傾くまで微睡んで、また瞼を開けた時には帽子は橋の下を出ていくかのように何度か風に転がされていた。飛べない鳥みたいだと思う。不格好に捨て置かれたそれから視線を切り、猫はお昼寝を継続する。

——あいつは、どこに行つたんだらう？

夢心地のまま、それだけを考える。

仏花の香りが満ちた、包帯男の跡地。

完全にしくった。

今すぐにも走り出したい衝動を堪えながら、麻中蓬は焦り気味に校内を歩く。

まだ日の高いお昼休み。十月末を迎えたフジヨキ台高校の廊下の窓には、剥がし忘れた学園祭用の張り紙がチラホラ目に留まる。名残惜しいお祭りの痕跡はそれだけでなく、学校には男女一組で歩く面々が増えたようにも思う。学園祭をきっかけにして、浮足立った気持ちで成立したカップルも、それに紛れて以前から付き合っていたカップルも表立って出てくるようになったのだろう。数にすれば本当に些細な変化かもしれないが、敏感にも意識してしまうのは、蓬自身も付き合ってる人がいるからで——目下、彼女への詫びと言いつく事を考える真つ最中である。

南夢芽。秋の空のように読めない彼女の心模様にさざ波を立てたのは、一時限前の授業の事。

今日の体育の内容は、バスケット。蓬の得意分野である。

彼女の前だから、という見栄で熱が入ってしまった事は弁解のしようもない事実であり、実際蓬が点を取る度に振り向けば、どこか誇らしそうに顔を綻ばせる夢芽と目が合った。でもそんな儂い夢も長くは続かず、現役バスケット部のブロックを何度も抜き去って集めた注目はいつしか多くを巻き込んで、凶らずも蓬は黄色い歓声を浴びる運びとなった。

繰り返すも、動機は恋人への見栄である。

しかし当の夢芽本人は、外野の女子に思わず手を振った蓬の事を、快くは思わなかった。

まだ何も話してこそいないが、授業の終わり際、警戒する猫の様に尖った雰囲気を持った夢芽の仏頂面からは、三か月以上の付き合いになった蓬には十二分に察せられる不機嫌がありありと見て取れた。

ので、現在進行形で彼女を探し、蓬は奔走中である。

学園祭の時と変わらないな——夢芽の気質を知りながら原因を作ったのは自分なのに、彼女に歩み寄っていく過程を、どこか楽しんでる自分もいる。ナイトさんの事は言えない。もうこの街を去ってしまった素直じゃない大人の人を思い出して、一階、二階と階段を上がる。バスケ後の疲労感は、少しも身体に残っていない。先の一件の言い訳になるが、最近妙に身体の調子が良過ぎるのだ。バイトも学業も交際も並行して、疲労を伴わず得る充実感はいっそ怖いくらいで、これも彼女といえるからだろうか、単純な自分が改めておかしい。渡り廊下に出る最後の階段。降りてくる男子とすれ違い様、視界の端に飛び込む白い軍帽。

顔の形の様な金の帽章は忘れようもなく、階下に降りていく学生を目で追う。確認出来たのはクラスに一人はいそうな短髪の男子で、蓬の知る奇抜な格好の転校生とは似ても似つかなかった。

「……な訳ないか」

人違いだった事にほっとする。きつと、今朝の事で錯覚してしまっただろう。もしまた会えたとしても、蓬個人では対処のしようもない。嵐のように過ぎ去って街に爪痕を残した出来事と、「彼」は切っても切り離せない関係だから、「彼」が再び現れれば、それは凶兆に他ならない。対抗する術をもう持たない蓬にとっては、この先会わない方が望ましい世界の住人。

でも、シズム君のことは——

もう少しだけ、わかりたかったと思う。

お互いに譲れなかった選択。結局目を合わせることもなかった対峙のイメージを振り払い、渡り廊下の戸口の前に立ち止まる。窓ガラスにはハロウインの張り紙が、目線の位置に貼られていた。

開けっ放しの通り口の先、鉄柵に乗りかかる様に腕を組んだ女子高生の姿を横から、安堵と共に蓬は見つめる。

明るいミルクテイカラーベージュのロングヘアから覗ける横顔は、檻に閉ざされた動物の様につまらなげな拒絶感で周囲を遮断している。あ、怒ってるなと蓬の予想は確信に変わり、それこそゲージ越しの猫に手を伸ばすその前にと、漏れかけたため息をぐつと飲み込

む。

鉄柵の上を橋の様に見立てて人差し指を歩かせた。こんな時の彼女のパーソナルエリアを不用意に詰めるのは危険だと経験則が物語っている。下手に言葉を選べば、要点を得ない会話を彼女は聞き入れない。数多浮かぶ選択肢から一つに絞り、蓬は切り出した。

「――夢芽。……一緒に、ご飯食べに行こう？」

緑の瞳を横に滑らせて、南夢芽がこちらを振り向く。

眩い日に晒されながらも、朴訥とした表情は感情が読み辛い。

流れる雲が渡り廊下を影で覆う。夢芽は暗がり沈むようにまた俯いて、ぽつりと、

「……ここがよくない？ 教室で食べなくても」

抑揚のない声に滲む言葉通りの嫌気。一応会話はしてくれらることに蓬は内心ほつとして、体育の件は避けながら当たり障りなく話を進める。

「教室で食べるだけでも、皆夢芽に慣れてくから。昼休みくらいどこでもって、思うかもだけど……学園祭の後だし、皆も夢芽の事少しずつ、受け入れてきてるみたいだし」

ピクリとも動かない横顔。その怜悯な表情がともすれば怒っているように見えたり、彼女が無意識に生む誤解は数知れず。付き合っている蓬にはそうでなくとも、客観的な南夢芽の印象は「近寄りたくない」や「浮いている」という評価に突き詰まる。だが一夏の人間関係や、彼女自身のささやかな勇氣の歩み寄りに、周囲の見方が変化しているのもまた事実で、蓬はいつも通りに右手を差し伸べる。

「夢芽がクラスに馴染んでくれたら、俺は嬉しい。だから、」

彼女がここで閉じ籠る時は、誰かに手を引かれたがってる時だ。

その特定の「誰か」に視線を遣って、夢芽は鉄柵に寄りかかって乗り上げていた足を渋々下ろしていく。

「別に、ご飯くらい、皆で食べても味変わらなくない？」

言いながら蓬の手を取って並ぶ夢芽の顔はまだ硬い。繋ぐ手の感触も疑念を抱えているかのよう心身が離れて、触れるだけに留まっている。むくれてる時は分かり易いと思えるようになったのは、彼女

が甘えてくれている証だろうか。それが思い上がりにならないよう努めて、蓬は慣れた苦笑を零す。

「情操教育大否定。……まだ、怒ってる?」

「……なんで?」

怒ってる。短い問答に答えを得て、蓬は再度考え込む。まさか自分がバスケで張り切ったから、女子の賞賛を浴びて恋人の矜蹙を買ったのだと理解はしても頭から説明は出来ない。具体のない抽象的なやり取りに互いの感情だけは交換してるのに、正解のない異性との付き合い。手は繋いでいるのに顔を合わせてくれない夢芽の機嫌を直す為にフル回転した思考は、先刻のハロウインの張り紙をくつきりと頭に浮かばせた。

「夢芽。十月三十一日の放課後って、空いてる?」

「……」

漸く彼女が目だけでなく顔ごと動かした。彼女からやや見上げてくる角度になると、蓬は背丈の成長を実感する。期待を秘めた澄んだ緑の瞳。真摯に見返して、蓬は言う。

「ハロウインのイベント。一緒に行きませんか? 二人で」

見つめ合って、息を呑む間が空いた。ともすれば眠たそうにも見える夢芽の目は少し見開かれて、怒りを逃がして平時に戻る。

「……蓬。その日、クラスで学園祭の打ち上げだけど。そのハロウインで」

「あつ、でし、たっけ……」

勢いで墓穴を掘った後悔。夢芽の機嫌を優先するあまり、大事なクラス行事を失念していた。何も言わなければ夢芽も蓬も参加していたところを、態々「二人」と特別感を煽れば、それを見逃す彼女ではない。案の定、氷の様に頑なだったその口元は綻んでいた。

「いいよ。二人で抜け出そう」

「……そういう意味じゃないんすけど」

「蓬が言い出しっぺだから。約束だよ」

さつきまで引き籠ってたのが嘘みたいに、彼女が前に踏み出す。

手を引かれながら告げられた特別なフレーズ。世の中で守らな

ければならない大切な物。こと今にあたっては、全くもって厄介な土産を残してくれたものだと言は思ふ。それを教えてくれたあの人の顔を思い出したら、破る事なんて絶対に出来ない。蓬の心情を見越してるから、夢芽は悪戯好きな子供の様に微笑うのだ。

「……はい、約束」

何度も心奪われたその笑顔の温度は、日々と共に変わりつつある。手を繋ぐことの恥ずかしさも段々と薄くなって、日常の中の小さな非日常も、掌に収まっていく。

歩幅を合わせながら、長さも細さも違う柔らかな指が絡まる。

そっちは恥ずかしくない？——耳を赤くして蓬は言う。

慣れたつもりだったでしょ？——夢芽が不敵に微笑う。

ぶ厚い雲が通り過ぎて、並んだ足が日向を出る。

「最近精が出るねー高校生。あんま無理し過ぎんなよ」

「平気つす。寧ろ最近、エネルギー有り余ってるんで」

バイト先のバックヤードでいつも通り交わす雑談。プリンのように頭頂の黒が目立つ特徴的な金髪が目印のバイトリダーは、相変わらずの先輩風を吹かせて接してくる。

蓬が高校入学から程なく、ここゆりマートに勤めだして、もう半年が経とうとしている。勝手もかなりわかってきて、最近バイトリダーから任される仕事も増えてきた。荷運びの区切りの呼び掛けは、言葉通り蓬を気にかけてのものだろうと有り難く受け取るも、この人の場合ただ暇潰しを欲しているケースも多い。案の定、今日も後者。

「おー、頼もしいねー。若手が戦力になって何より何より。おぼさんも肩の荷が下りるわあ」

ここで然るべき言葉を返さないとバイトリダーのセルフ突っ込みが強制イベントで起きる。毎度の如くスルーしている蓬だが、「戦力」というワードのせいか、とある人物の顔が頭を過ぎって、

「……最近、暦さんってどうですか？」

山中暦。蓬とバイトリダー共通の知人。友人、と言っても差し支えない関係かもしれないが、蓬との年齢差的にはなんとも微妙な距離にある。

ただ、一月をかけて単純な言葉で括れない間柄になったことは確かだ、今はそれぞれの日常に戻っている。ともすれば暦にとっては日常の方が激務かもしれないと、年下の立場から心配を寄せてしまうのは彼の透明な経歴を知るだけに無理からぬ話で、答えを探すバイトリダーの悩ましい顔にドキドキする蓬だった。

「ん〜、旦那も骨折からやっとな容態良くなってきたところだからね、暦君来てくれて助かってるよ。……33まで無職って聞いた時は、ちよつと言葉出なかつたけど、ブランクある割にはガッツあるよ、暦君」

笑顔を添えられた評価にほつとする。無職という肩書きを失った山中暦、というものがなんだか想像出来ないが、蓬はここで働きだした自分のようにあくせくと働いている彼の姿を想像した。同じ脅威に立ち向かったのに、今は別々の場所で戦っている。それが我が事のように、嬉しかった。

「まあ、人助けしてたんで」

「またそれ？ 人助けサークルで知り合ったんだっけ？ 蓬君と暦君」

「そんなところです。……今は会長居ないんで、形だけですけど」

別れも告げずに去っていった人の後ろ姿を思い出す。包帯の下に毒々しい痣をひた隠しにした、人の弱味にはお節介を焼く癖に、自分の事を話すのはとことん下手だった人。蓬の人間関係の中心に、いなくなっても彼はいる。あの季節を彼と共に過ごした誰もが、そう思っている筈だった。

蓬の人生を通り過ぎたあの人から貰った熱を、今でもよく思い出す。

五千年前から蘇った“怪獣使い”——ガウマさん

彼がこの世界に現れたその時期に、きつと数え切れないほど多くの人達が“怪獣”による影響を受けていた筈で、バイトリーダーもその傷跡を思い返すように話し続けた。

「まあ、あの頃は怪獣怪獣で大変だったしねー。とどのつまり、仕事なんて全部人助けだし、あんな時期に動けたんなら、そりゃ適正あるか。……今良い事言った？ 私い？」

「最後にそれがなければ……」

前向きな人だと思う。その剽軽さは誰の前でもそうなのか、蓬という子供の前だからなのか。ウザ絡みもするし弱音も吐くけれど、蓬にはない器用さを持った大人の人。苦笑で流しても、その勢いは衰えない。

「相変わらずそっけないなー高校生は。私がそのくらいの頃はもっと愛想……あつたかな。なかつたか？」

「そこ迷わないで下さいよ……。どうだったんですか？ 昔のバイ

トリリーダーって？ って、これ前も聞きましたっけ」

蓬が質問を取り下げても、バイトリーダーのスイッチは既に押しっぱなしで、

「なくんもなかったよ。何か出来た気はするけど。それこそ、同級生と海まで原付乗って飛び出すの夢に見るくらい、今はつまらないおばさんですよ」

リピートを覚悟していたその内容が、少々変化している事に蓬は気付く。

昔を振り返るように蓬に肩を向け、彼女は腰に手を突き天井を仰いでいる。彼女が視たと言う『夢』に、蓬は思い当たる節があった。

怪獣に関わっていた者達しか憶えていない。一度この世界が、過去に呑まれかけていたことを。

多くの爪痕を残した怪獣災害の中でも最大規模の騒動は、誰に知られることなく幕を閉じた。詳細は憶えていなくても、あの日彼女も過ごしたのかもしれない。暦の未練と重ねた出来事を。

それぞれの過去を舞台裏から覗いていた蓬には、断片しか知り得ない事だけだ。

その思い出の良し悪しはきつと、暦と同じではないのだろう。

再び蓬に向き直った彼女の胸元で『橘』の名札が揺れる。

「高校生は、今を楽しみなよ？」

晴れ晴れとした表情で決め台詞を口にする橘さんに、蓬は親指を立てて応えた。

「ぼつちし、ハロウィンも出かけてくるんで」

「おう、そつないじゃん。ハロウィンかあ……。そっいや最近、まだ当日じゃないのにすっごい格好してる人見たな……。お店のお客さんで。蓬君も知ってる？」

左手の甲に片肘を掛けて、顎に親指を添えながらバイトリーダーは考えるポーズでそう言った。基本レジには立たない蓬には、ピンとこない話だった。話題を提供したのは自分だがいよいよ深刻な脱線具合になって来たので、蓬は彼女に背を向ける。

「いえ、初耳ですけど。ハロウィン前の予行演習……。なんて、する人

いるんですかね?」

「わっかんないよ。世の中広いんだから。こう、真っ赤な逆立てき、金色の包帯みたいなの胸にグルグルしてえ、その癖おへそは出してんの。どこの国のファッションなんだろ……」

髪から上半身にかけての丁寧至極なジェスチャーのおかげで、蓬の記憶の柵からその奇抜な人相を引き出すのは容易だった。隈の濃い鋭い目つきさえ瞼の裏に描ける。仕事の振りで彷徨わせていた視線が行き場を欠いて静止する。返事のない間を、橘さんに気取られた。

「……蓬君?」

「うちの……隊長です。その人」

「空中分解した、人助けサークルの?」

「はい」

「……会長じゃなかった?」

「隊長なんです。ミイラの」

「言ってることバラバラじゃん……」

尤もな指摘に、返す余裕はない。

それ以降の仕事は、殆ど手につかなかった。

◇

十月も暮れに差し掛かると、日の入りも早くなる。六月頃であれば学校終わりに寄り道をして漸く変わっていくのを眺めていた空の色は、放課後を迎えて橋の下の待ち合わせ場所に集まり、見慣れた顔色が揃う頃には既に橙の残照を強めていた。昨日お供えた仏花が手付かずの位置にそのままある、居住者を失って久しい「ガウマ隊」の秘密基地。ぽっかりと空いた大穴の様なそこを横手に、蓬と夢芽が並んで対面する少女もまた、この場所を大切にしていた仲間——相変わらずの肩や背中の露出が際立つ格好で、飛鳥川ちせは後ろ手に買い物帰りらしきビニール袋をぶら下げながら小首を傾げた。毛先の黒くグラデーションがかかった赤い三つ編みが、同じ角度で揺れる。

「——ほんとなんですかよもさん? ガウマ隊長目撃情報って?」

「流星に人違いじゃない……?」

既に話している夢芽もまだ半信半疑の眼差しだった。無理もない二人の反応を間近にして、蓬は返って冷静になる。真偽不明のまま一人抱えるよりは、顔を合わせて突き詰めていく方が心も軽くなった。何よりガウマの安否を案じる気持ちは、ガウマ隊の誰しも同じなのだから。

「うちのバイトリーダーが、それっぽい人見たって。あんな格好の人そうそういないし……皆で共有しておいた方がよさそうかなって。暦さんは?」

「あの人は今、飲食のブラックに吞まれてるんで、当分あてになりませんよ」

「仕事って怪獣よりヤバい奴じゃん……」

ちせの冷たいコメントに怯む夢芽。社会という荒波に出る前に、この子に苦手意識を植え付けてはいけない。蓬はやんわりフオローを入れる。

「バイトからならそうでもないからね? ちせちゃん、前にガウマさんがここ住んでるって見つけた時は、確か、学校の不審者情報だったっけ」

「ですね。あの時は隊長がここ通ってたから網に引つ掛かりましたけど、所定の位置にいないなら特定難しいと思いますよ。でも、皆で手分けすればすぐ見つかりますよ……ってこれ、怪獣の時も言いましたね」

明るく振舞ったちせの声が尻すぼみになる。ガウマ隊の皆でとある怪獣の搜索に乗り出したのも、遠い昔に感じられる。あの時は蓬の迂闊な発言やガウマの落ち度が原因だったけれど、今回は相手が当のガウマだ。いなくなった彼が再びこの街に帰って来たとして、世話を焼いてくれた彼をあの怪獣の様に探し回るのはいない知れぬ抵抗があった。

ガウマがいなくなっていた今までを、いつの間にか受け入れていたことを蓬は知る。

彼の寢床で横たわっている花束が、その何よりの証で、本当は今で

も、あの人はどこかで誰かに余計な真似をしている様な気がする。いつまでも引き摺ってんじやねえよと言ってくれた怪獣は、ちせの左腕にその象徴を残すのみで、この世界を飛び去って行った。皆が俯く中、希望を捨てきれない声音で、夢芽が呟く。

「……ホントに、ガウマさんなのかな」

「はつきりさせよう。皆で」

もうここからは、自分達の問題だと、右手の拳を握り込んで蓬は答えた。

今はまだ、あの人ほど大きくて頼りがいのある掌ではないけれど、掴みかけた糸を、離したくはなかった。

「そだ。今日はお二人にお渡ししたい物が」

場を仕切り直すようにちせが手を合わせた。何々、と一同はより近くに集まって、ちせが背中に隠すようにしていたビニール袋を中心に持ち上げる。焦らす様に蓬と夢芽に視線を配り、パツと袋の口を開く。

夢芽の眠たげな眼が僅かに見開かれたのと同様に、蓬も「おお」と感嘆の声を上げる。夢芽が見たままを口にした。

「これって、ちっちゃいゴルドバーンの、シール……?」

ちせの左腕に刻まれた——正しくはボディペイントなのでこの表現は語弊があるが——それでも彼女と一体になったと表現しても差し支えない、彼女の友達でありガウマ隊と共に戦った怪獣、ゴルドバーンのデフォルメ版が、まだシートの状態で複数ビニール袋には詰め込まれていた。デフォルメと言っても、ちせの隠さなくなった才能による精緻なデザインはそのまま、サイズだけがほっぺにもくつつけられそうなくらい手頃になっていた。ちせは夢芽へ顔を寄せると、爛々と目を輝かせ、

「ご明察です南さん。これはお試し用なんで、クラスの誰かに配っておいてくれませんか？ 出来れば反応も聞きたいです！ いずれ売り物にするかもなんで」

まるで大いなる一步を踏むように不敵な目で見上げてくる年下の女の子は、枠に囚われない服装そのままの印象で、初めて会った頃よ

りも自由に見える。不安げな顔も多くは見せたけれど、それが不自由の中で自分なりに前向きに選んだ、飛鳥川ちせの道の一つなのかもしれない。ほんのり心配で、少し羨ましかった。

「やりたいこと、見つかったんだ、ちせちゃん」

蓬は袋を受け取って片手にぶら提げる。手の空いたちせは橋の外に振り返って、もう一度向き直る。あそこから顔を出した怪獣を背にするように、ちせの顔は誇らしげだった。

「まだ模索中ですけど。やるからにはいつか、ハロウィンに参加するみつつんながこのペイントしてくれるように頑張るんで。二人供何卒、この飛鳥川ちせの名前をお広め下さい。……あと、ゴルドバーンも」

最後に照れ臭そうに、最高の友達の名前を口にする。

広がり続ける彼女の世界を照らすように、橋の外の夕陽が眩ゆく映った。

十月三十一日土曜日、ハロウィン当日。待ちに待ったというには気にかかる事が多過ぎるが、兎にも角にも当日を迎えて蓬は現在、フジヨキ台高校の校門脇に立っている。

予定としてはここで蓬含めた1―3一同が集合し、それぞれの仮装を終えて出発する手筈だ。空はもう夕日に染まっていて、ここから駅前に着く頃には夜の帳も下りて、現地は祭りの風情を醸していることだろう。

気温の落差に備え蓬はミイラの仮装の上からパーカーとブレザーを標準装備。

蓬の右隣に立つ眼鏡の男子、なずみの頭も学園祭の流用で脳天に鉈が刺さったスタイルで、ばつちり血濡れメイク済み。そのまた彼の隣で気だるげに佇む男子、淡木の出で立ちは制服の上の首だけパンプキン仕様で、ギザギザにくりぬかれた覗き穴からギリギリ淡木と識別可能となっている。彼と対面して蓬がビビったのがついさつき。マツシユヘアで淡木を淡木と認識していた事実が途端に申し訳なくなった。

夢芽を待ち侘びながら蓬は幾度か校舎を振り返り、なずみはスマホでハロウィンの盛況をSNSにて鑑賞中。女子グループ待ちの空き時間、手持ち無沙汰な淡木が定期的に話題を振ってくる。

「なずみ、ハロウィンって何のお祭りか知ってる？」

「秋のクリスマスみたいなもんじゃないの。知らんけど」

「死者のお祭りだつてさ。悪霊とか魔女とか出てくるから、そういったバレないよう仮装するんだつて」

「ホラーカフェしてたうちにぴったりじゃん」

「だな。ミイラもいるし」

「お化けも重役出勤——でも、ないか。今日は自分から行ったんだっけ？ 南さん」

尋ねられた蓬は校舎から視線を戻す。刺さった鉈から血を垂れ流した半死人のなずみ越しにカボチャが頭を傾けている構図。蓬が夢

芽と付き合いだしてから、変わらず接してくれることが結構有難かったりする。普段の会話にレパートリーが加わった、蓬の繋いだチャンネルを許してくれる距離感。

「正直意外だったって言うか、もうちょいぐねるの覚悟してたから、後で何か要求されないか怖いっす……」

今日の夢芽は学校に着いて蓬と離れてからもやけに素直だった。学園祭で流れを覚えたからだろうか。躰にも近い心境になるが、メイク担当のらんかの元に自分から行った夢芽の行動力に感動したことは蓬だけの秘密である。後で夢芽にはそれと知らぬ形でご褒美でもあげたい気分で、つまりは先の発言は対面上の冗談だったりする。まさかこの心を馬鹿正直には言えない。自分でも猫可愛がりにならないか自制してらくらいなのだから。恋人の話題は出来るだけ自分を下げていくスタイルで——なんて浅知恵は、友達に容易く見破られたりするのだが。

「とか言って、顔に出てんで、南さん係」とカボチャが嗤う。

「お父さんみたいだな、蓬」と鉈も乗つかる。

「二応彼氏です……」とミイラは項垂れた。

包帯の上からほっぺを触る。なんで気付かれたんだろ？ 頬が緩んでないか今後気を付けようと誓いを立てた蓬は逃げる素振りで校舎を見つめる。そういうとこだぞ、と野次は聞き流した。

「ごめん、待った？」

丁度、お化けが校門にやって来た。

三角頭巾や白装束、目元や口元を新鮮な血に濡らした夢芽の姿が、夕陽に彩られて側にある。少々はだけ気味な左脚の太ももには、蓬の右手の甲と同じ傷跡が残っていて、学園祭でふと笑い合った真新しい記憶が蘇った。一度きりと思っていた衣装をお互いに確認して、言葉を交換する。

「ううん。お疲れ、夢芽。結構気に入ってたんだ、その衣装」

「まあ、学祭は、楽しかったし。蓬ズル……顔だけじゃん」

「いや、これだけだと夜寒いんだって。お化けも冷えない？」

「……ちよつと寒い」

思い出したかのように夢芽が自分の肩を抱き締めた。一番寒そうなのは素足だが、お化けになりきる上でそもそも妥協する発想がなかったのかもしれない。蓬は苦笑しつつブレザーを脱いで夢芽の背中に回る。袖を通さない格好で、白装束の上から羽織らせた。

「これ、気休めだけど」

「……ありがとう」

間近に立っていたから気付ける、柔和に下がった眉と微笑。心なしか夕暮れが彼女の頬を染めているようにも見える。自分はいつも振り回される側で、彼女が本格的に照れたところは見た試しがないが、その新しい一面を引き出せることが喜ばしかった。などと感慨に耽っていたところ、鳴り響くシャツター音。

「アツツ……こつちが火傷するわ」

所帯じみたイントネーションで首に吊り下げた一眼レフを構える女子——角井鳴衣は眼鏡の奥から蓬と夢芽を観察している。首から下げた相棒で蓬達の一部始終を激写したのは明白であり、彼女に向けて夢芽が無言の圧をかけた。こと親友の鳴衣だけには、その遠慮のなさが信頼の表れに思えて少し羨ましい蓬だったりする。

「今の撮った？ おかあさん？」

「もち。毎回いい顔ありがとうございます、彼氏さん。うちの夢芽がお世話になっております」

「いえいえ、こちらこそ。おかげさまで、いい子に育ってます」

「二人供うつるさい……」

手でデユクシと脇腹を小突かれる。なんで俺だけと思わなくもないが、そんな茶番が出来る人間関係こそあの戦いで掴み取った平穏で、蓬は穏やかな面持ちで仲睦まじい二人を見守った。

「……なんで仮装してないの？」

「うち撮る側だから。気にしないで喋る空気とでも思つて下さい」「うっぎ……」

煙たそうにしながら流れるように並んで自撮り。遅れてやってきたナースコスものらんかと、トンガリ帽子&ローブ着用魔女っ子スタイルの金石も、校門に着くなり二人の様子にさらりと突っ込む。

「あの子クラス違うくない？」

「……保護者同伴で特例だつてさ」

金石とすれ違い様、鳴衣が彼女へと迅速にカメラを向けた。魔女はそれを見越していたかのようにトンガリ帽子を宙へ放り投げ、見事それは丸団子の頭に被さった。

シャッターチャンスを阻まれ鼻白む鳴衣。冷淡に振り返る金石。二人のアイコンタクトなどまるで意に介さず、というか全く気付いた風もなく、夢芽は見映えだけ仮装した鳴衣の隣で身を傾けもう一度パシヤリとスマホを鳴らした。その瞬間には既に鳴衣も笑顔である。魔法の様な早業だった。

「女子の距離感わからん……」

「わかる……」

淡木の一言に深々と頷く男子勢。世の中わからないことだらけだと思ふと、最後まで理解し合うことのなかった元クラスメイトの事に、蓬は思いを馳せる。

シズムならきつと、いつも通りの格好でハロウィンに来たのだろう。

仄かな郷愁を運ぶ暮れなずむ日の下で、蓬達の後夜祭が始まる。



駅周りの風景はクラスの誰しもが予想した通り、人出で賑わい歩行者天国の盛況を博していた。交差点を行き交う仮装集団はパレードの様な有様で、夜をもものともしない都心の街明かりや、押し返されそうな程の雑踏で音と光に溢れている。正直なところ騒がし過ぎるのは夢芽の好みではなかったが、そこは蓬がはぐれないように手を引いてくれたのでよしとした。

元々ハロウィンへの参加は祭りの空気を味わう程度で、学園祭の打ち上げは予約していたカラオケボックスが中心となる。無難であり鉄板らしいが、その辺馴染みのない夢芽にはどちらにしる恐怖である。鳴衣と二人でしか来たことがないので猶更だ。しかも蓬と別室

だったりする。何の冗談だ。

……そこはまあ、夢芽から志願した事だったりするのだが。蓬との約束。周囲にもう少しだけ合わせる事。姉がいなくなる前、家族とも自然に触れ合えていた頃のように、蓬は夢芽が周囲と上手くいく事を望んでいる。怪獣の力で幼少期の夢芽の過去を知ってくれているからこそ、強く。不器用な今の南夢芽も、周りに合わせる事が出来た昔の夢芽も、蓬の中では一つなのだろう。その信頼は、裏切れない。

ズルい約束を先に取り付けたのは、どっちだろう？ 彼がいつも側に居ることが一番の贅沢で、だから部屋を分けたのは、夢芽なりの覚悟。肌身離さず持っていた知恵の輪がなくとも、今夜を乗り切る決心を固める。

息を吸い込み、夢芽は今、カラオケのモニター画面の前でマイクを握っている。

画面に表示される『あいみょん』の文字に「おお〜」と皆どよめく。鳴衣がタンバリンを構える。

感情を乗せて歌い切った『空の青さを知る人よ』を聴き終えて皆が「おお……」としんみりする。らんかが「……恋愛相談ならうち乗るから」とやけに心配してくれた。失恋ソングと思われたのかもしれない。鳴衣は最後まで眉一つ動かさずタンバリンのリズムを崩さなかった。

それなりに盛り上がっていた室内に水を差したように思われたが、次の曲が始まったので夢芽は鳴衣の隣に戻った。耳元で忌まわしい音を鳴らされたので肘で小突き返す。ソフトドリンクを一口飲んだ。蓬は隣の部屋で何してるだろと考えながら、彼から借りたまま袖を通したブレザーのポケットに手をつ突っ込む。

妙な感触がした。

ポケットからそつと引き出して覗き見る。あ、と漏れた声は音響に掻き消けされた。

曲から曲の切れ間。充分に声が届くタイミングで、夢芽は意を決し、

「あのさ……皆に、渡したい物、あるんだけど」

「ちよつち皆さん。夢芽さんが、渡したい物あるそうです」

タンバリンを叩き注目を集めると、鳴衣が目配せしてくれた。ほんとに保護者じやんと内心毒づく。「ありがと」と小声で返し、夢芽はポケットから“それ”を引っ張り出す。

飛竜の紋様を施されたシールの束。掌よりもやや小さなそれらをテーブルの中心にトランプみたくに広げると、同級生達が身を乗り出した。

「ハロウィンだし、こういうのもありかなって、友達が作った奴なんだけど、良かったら、貰ってつてくれないかなって……」

「ロククな友達持つてんね、南さん」と鉦眼鏡が言い、

「これ自分で作ったの？ スツゴ。デザイナーさんと友達なの？南さん？」

と施術失敗ナースもとい、らんかが興味を示してくれた。彼女は夢芽のメイクを担当してくれたのでギリ覚えてる。普通に嫌われてるもとの思い込んでいたのに、会話に乗ってくれることに少し驚く。

「いや、中学生なんだけど……」

「夢芽さんより世渡り上手いんじゃないの、その子」

おかうる（略）を飲み込み夢芽はまたつまらないものをデユクシしてしまった。さもありませんと鳴衣がしたり顔を向けてくる。思ったよりも好感触でそれぞれシールを取っていくクラスメイト達を眺めていると、自分が踏み越えてこなかった線引きをあっさり越えられた感覚が、なんだか信じられなかった。

特に蓬を囲んでいる人達は、夢芽とは無縁の人種だと、そう思っていたのに、自分も一応クラスの輪の中にいるらしい。もう一步踏み込もうと、夢芽はちせの頼まれごとを遂行する。

「あとそれ、一応名前あるんだけど……」

「この絵？ なんかのキャラクターなの？」

テンポよく反応してくれるらんかに、その名を伝えようと口を開き——その瞬間、けたたましい音楽が部屋に満ちた。皆の目が画面に集まる。長々しい英語のタイトルの下に並ぶ、小さな文字列は、

『GOLDBURN』

「ゴルド、バーン……」

既に発声の指示を下していた脳はちせの友達の名前を読み上げ、誰が入れたか知れない歌のバンド名と偶然にも一致した。元ネタかもしれないと察するにはあまりある状況。激しい洋楽の籠った部屋で、不思議と鳴衣の声が響き渡る。

「今考えたでしょ、夢芽さん」

ずっとむっすり黙っていた、耳にピアスをした女子が嘔き出した。ドツと笑い声が湧き上がって、らんかの顎マスクがおおいにズレた。

「……私、飲み物入れてくる」

口実を作って、夢芽はたまらず逃げ出した。

部屋の外に出た途端、詰まった息を吐き出して、ドア脇の壁に背を預ける。

やっぱ人間、めんどくさい。

でも縮まった距離はきつと本物で、我知らず築いてきた薄い壁が一枚剥がれ落ちた気がした。恥ずかしさと奇妙な達成感の混ぜ合わせを胸の内に反芻する。初めて経験した、大勢にいじられる雰囲気。

思ったよりも、悪いものではなかった。

きつと同じ経験をしたであろう姉を想う。一番近くに居たのに、何も気付いてあげられなかった人。不器用なりに周囲と合わせようとしていた、血を分けた姉妹。姉の最期はもう変えられるものではないけれど、夢芽が知っている南香乃の一面も、一部分に過ぎないのなら——合唱部に親しんでいく過程で、今日の夢芽の様に、こそばゆいじりもあったなら。せめて、姉が周囲に合わせられるよう歩み出した、始まりだけでも。

「疲れた……」

考え過ぎて、夢芽はガス抜きにスマホを眺めた。室内では気付きようもなかった一通の通知。

〈そっちどう?〉と短い蓬の文面に、夢芽は目元を柔らげて、

「——あれ、夢芽も飲み物?」

隣の部屋から、ミイラが出てきた。

両手にコップを持った現代に蘇りし奇人と目が合って、夢芽は堪えられなかった。

「めっちゃ水飲むじゃん、ミイラ」

「水分足りないんで。じゃなくて、これついだから、他の人の」

「……ガウマさんもそんな風に、一杯コップ持ってきてたよね、海ほたるで」

「あつたなそういや……。あれ、俺らが自分で水持ってきてるのに、ガウマさんも皆の分持つて来たんだよね、確か」

ぱったりと会ったのに、待ち合わせしてみたいにドリンクバーに向かう。

番号が振られた部屋が両脇に並んだ廊下。カラオケボックスからくぐもった音楽は、二人にしか通じない言葉を掻き消したりは出来なくて、

「夢芽、なんかいいことあつた？」

「……なんで？」

「いや、こつち来た時より生き生きして見えたから。違った？」

「お化けが生き生きしてるって変くない？」

「水飲むミイラいるんだからいいでしょ」

学園祭に戻った様に、二人茶化して笑い合う。

コップで塞がった手の不自由がもどかしい、祭りの隅のささやかな喧騒。

ドリンクバーやソフトクリームメーカーが併設されたスペースからやや離れた壁際で、夢芽は背中を預けながら人を待つ。蓬は友人の分のドリンクを届けに部屋へと戻っていったが、また抜け出してここに来てくれると約束してくれた。

彼を待ち侘びながら、両手にしたコップを見比べる。右手には夢芽のカルピスソーダ。左手には蓬のファンタメロン。夢芽は特にソーダが好みという訳ではないけれど、蓬と付き合っている間の一夏は、よく一緒にソーダ味のアイスを食べていたから、その影響だったりする。

涼やかな水色のアイスを齧った時、蓬に「ソーダ好きなの？」と訊かれたら「蓬の色だから」と返した時の彼の反応といたら可笑しくて仕方なかった。だから飲み物の色にだって、蓬を感じていたいのだけれど、カルピスソーダの色は何にでも染まれる白である。同じなのは名前だけだ。それを残念に思いながら、もう片方のドリンクを見つめる。

炭酸水の小さな気泡が浮かぶ澄んだ緑。蓬のヘアピンと同じ差し色。緑が好きなんだろうか——そんな想像で、彼の事を一つ発見した気になっていると、ミイラは約束通りやってきた。

「お待たせ、夢芽。飲み物ありがと。……打ち上げ、どう？ 疲れた？」

夢芽の隣に着くなり気遣う口振りで、ドリンクを受け取る蓬。一口付けながら夢芽を横目にする彼に、土産話をする用意はあった。

「ううん。思ったよりかは、平気。……さつきゴールドバーン配ってきて、少し、クラスの皆と話してきた。割と好評だったよ。ちせちゃんとかゴールドバーンに、頭上がらないかも、私」

「あ、やっぱそっち入ってたんだ。俺から配ろうって思ってたけど、なんか、すっかり馴染んでんね」

「でも人に合わせるのほんっと疲れる……」

「いいよ。ちよつとずつ慣れてこ？ 俺がいる時は、俺が夢芽に合わせるから」

包帯の下から蓬が笑いかけた。夢芽はぶいっと顔を逸らす。おかあさんよりおかあさんじゃん——口の中で独り言ちて、カルピスソーダで喉を潤す。

鏡の様に夢芽と同じ仕草をして、傾けたコップを口から離すと、蓬はぼつぼつ話し出した。

「……でもやつぱ、一人でも、ちゃんと夢芽は合わせられるんだな、つて。勝手だけど、ちよい複雑」

俯き気味にそう言った彼の横顔に漂う寂しさの訳。夢芽の人間関係の広がりをお願いながら矛盾に満ちたその発言は、手を引いていた子供の独り立ちを見送るような、ちよつと大げさな落ち込みようが見て取れた。

——やつぱ私いないと駄目だな、この人

と考え直すのと同時に、彼のような人でも誰かに必要とされる事を必要としているのだと改めて思う。

それはダイナゼノンに乗った誰しもが経験した、心の隙間を埋めた掘り所。今はその場所が、夢芽にとっては蓬の隣で、蓬にとっては夢芽の隣。彼には格好のつかない弱音だったのかもしれないけれど、隠さないその本心が夢芽には嬉しかった。

「前はそういうの、言わなかったよね、蓬は」

「めんどくさいのは、自覚してます……」

苦笑で誤魔化す蓬と同じくらい顔を俯けて、夢芽も不格好な言葉を選ぶ。

「ううん。それくらいが丁度いいんだよ、私には」

空いた左手を横に滑らせていく。視界の端で蓬がそれに気付いたように、右手から左手にコップを持ち替えた。傷跡の付いたその手が、夢芽の掌に触れかけて、

軽快な通知音が二重に鳴って、二人の間を裂いた。

伸ばした手をピタリと止めて顔を合わせる。全く同じタイミングで重なった通知音は、蓬と夢芽が共通して入っているグループである

証。アイコンタクトで認識したその瞬間、戦っていたあの頃のように優先事項を切り替える。蓬が取り出したスマートフォン画面に表示されていたのは、やはりガウマ隊からの報せだった。

発信者はちせ。へガウマ隊！ エマーージェンシーです！と、彼女の叫びが聴こえるかのような一文の後に続く、一枚の写真。

一目には何の変哲もない、ありふれた自撮り写真のように見えた。コンビニの前を行き交う人混みを背景に並ぶ男女一組。夢の国から出てきたお姫様や王子様になりきった煌びやかなコスプレ姿で、二人の世界に入り込むかのように肩を寄せ合う二人。夢芽と蓬のほっぺもくつつきそうだったが、彼が先に折れて身を離れた。目の端の横顔はほんのり赤い。夢芽としては別にくつついても構わなかったけど、隈なく画面に目を凝らしていてそれどころではなかった。

ちせからへ後ろに注目して下さい！とメッセージが届くのと、夢芽がその意図するものに気付いた瞬間が重なって「蓬っ、ここ！」と画面右端を爪先で指差す。

丁度画面に顔が見切れているが、ピンクにも近い派手な髪色は隠しようもない。一度目に飛び込めば誰もが意識せざるを得ない、金の包帯と黒のジャケットに装ったその出で立ち。蓬も気付き、食い入るように画面に顔を寄せた。

「これって……ガウマさん……?!」

見紛うはずもない。ダイナゼノンに関わる全ての関係を作ってくれた男の人。身体の奥からじんわりと広がる熱が、唐突にいなくなってお別れらしいお別れも出来なかった彼の実在を、一欠片でも見つけられた喜びだとしても、あまりに実感が湧かなかった。

「駅周りってここからすぐじゃん！ 夢芽！ 今からでも抜け出して、ガウマさん探そう！」

飲みかけのドリンクを飲み干して、興奮気味に蓬が顔を向けてくる。頷き返そうと夢芽は身を傾けて、そうするとドリンクバーまで続く一本道を見渡せる。各部屋のドアが並ぶ景色。廊下の突き当りを曲がっていく長身の後ろ姿に、夢芽は目を見開いた。何せ陽炎の様に消えていったその背中もまた。見覚えのあるジャケットの下から包

帯を覗かせていたのだから——夢芽が仮装でなく本物の幽霊だとしたら、今の衝撃で昇天していたと思う。それくらい驚いた

「……今、そっちにもガウマさん見えたんだけど」

狐に化かされた心地で奥を指差す。蓬は一旦顔を向けるも、かえって冷静に写真と夢芽を交互に見返した。

「……いやないでしょ。この写真送られてきたのさつきだよ？」

「そっくりさん、とか……？」

現実を処理しようにも明後日な想像ばかり膨らんでくる夢芽の代わりに、蓬は興奮と動揺にブレーキをかけて状況を整理する。

「それこそそんな訳ないって。……あんな顔色悪い人、そうそういる訳ないし、大体ガウマさんの格好する人何人もいたら流石に、」

言葉よりも先に蓬の思考が行き着いた可能性に、夢芽も同じタイミングで勘付いた。カラオケボックスの外で今も盛り上がり続ける仮装の祭典。日常の中の非日常を説明出来るその答えを、二人目を合わせて口にする。

「——ハロウィンじゃん」

声を出して共有すれば、突き動かされるように蓬が前に出た。

夢芽も同じ想いだったが、まだソーダが半分以上残ったコップのせいで早歩きを急停止。「ちよつと待って」と蓬に声を掛けて、両手にしっかりコップを持った。唇に飲み口を添えてくいつと顎を持ち上げる。「噓せないようにね？」と夢芽より下の目線で蓬は保護者モードになっていた。「ん」と返しながら無理に飲み切った炭酸の刺激が喉を通る。少々鼻がツーンとするのを我慢して、夢芽は蓬と頷き合う。

共に小走りで廊下を駆ける。突き当りを曲がったところで、角の部屋に消えていくあのド派手な髪色をすんでのところまで目視出来た。先に行く蓬が内側に閉じていくドアをギリギリで掴んで、一気に開け放つと同時に彼は叫んだ。

「すいー… ませんー！」

軽快な音楽が流れる室内の空気を突如現れたミイラとお化けが凍らせる。テーブルを真ん中にしてソファに腰掛けて対面する成人男

性二名。片や夢芽のよく知るいかつい顔のあんちゃん改めただの良
い人ガウマ——とは、背丈くらいしか合っていない、よく見れば身体
も細くない。頬の傷もなく、ガウマ特有の目つきの鋭さよりも、眉が
気弱に垂れ下がっている面立ちだった。全体的に、ガウマのパチモン
臭い。本人を前にして心からそう思う夢芽の隣で、蓬も啞然としてい
た。

そして、二人が息を止めるくらい驚いた訳は、部屋の奥に座るもう
片方の男性のせいでもあった。王族や貴族を想起させる白と金の華
美な衣装に身を包み、黒髪マッシュヘアと眼鏡を掛けた、夢芽にとつ
ても見覚えある特徴的な風貌。ガウマと機を同じくしてこの世界に
混乱を招いた集団、怪獣優生思想の一人ジユウガの、これまたコスプ
レらしかった。

ジユウガ本人の服装を抜きにすれば顔のパーツはよく見る類で、こ
ちらのジユウガ（仮）もガウマ（仮）も同様引き締まらない顔をしてい
る。それはそれは学生上がりたての若人が見映えだけ扮装したよう
な、本人を知っている夢達には違和感しかない格好。

沈黙が続く中部屋からだだ洩れの音楽。誰にも見向きされぬまま
モニターに虚しく表示される『UNION』の文字。マイクを持った
ジユウガ（仮）は、恐る恐る丁寧な物腰で震えた声をマイクに乗せた。
「……どちら様、ですか……?」

「えっと、俺達は、」

未だ動転の最中にある蓬が言葉を彷徨わせる。夢芽は一步踏み込
み彼と並ぶ。目の前の大人達のこととはわからなくとも、ここに二人い
れば、考えるまでもなく答えは同じだった。

「——ガウマさんの、友達です」

声を重ねてそう言えば、暫定（仮）の二人は困ったように顔を合わ
せ、ガウマ（仮）は気圧され気味に挙手すると、事情を飲み込んだよ
うに話し出した。

「俺も、ガウマさんのバイト仲間です……」

今度は、夢芽と蓬が顔を合わせる番。

示し合わせてたみたいにまた二人の通知音が鳴って、蓬がスマホに

目を通す。写真が送信された旨とへまた隊長見つけましたあ……と
いうメッセージ。直接グループまで確認しなくてもその通知欄だけ
で点と線が繋がった。今夢芽と蓬の前に居る彼と、ちせが立て続けに
発見した二人も、類友だとするばらば。

どちらともなく、夢芽と蓬は吹き出した。

室内に籠る笑い声に、大人達は困惑を深めている。

◇

交通整理のバイトでガウマと知り合ったのだと、彼は懐かしそうに
に教えてくれた。

現役大学生が傍らに始めた、短期間の小遣い稼ぎ。夜勤で時間帯が
重なること数回。ガウマはすぐに他のバイトに移っていったが、顔に
似合わず世話焼きな人だったとしみじみ語った。何でも恋愛相談に
も乗ってくれたらしい。世の中には守らないといけないことが三つ
あると熱弁して格好付けて職場を去った翌日には、駅近くでプラカー
ドを持ち歩いていたのを見掛けるようになって、偶に話し掛けていた
らしい。この仮装も、近頃会わなくなったガウマに見つけて貰えるよ
うにとのことだった。

あの頃は怪獣で大変だったしね、と遠い目をする彼に「どっか行っ
ちやっただですよ、あの人」と蓬が伝えると「そっか」と寂しそうな
声が返った。

世の中で守らないといけない大切なことの三つ目は、彼も聞かされ
ていないようだった。

ちなみジユウガ(仮)は友人らしかった。約束と愛に背を押されア
プローチを仕掛けにいった結果、無残にも届かなかったところ同じ相
手に振られた同士で傷を舐め合うように友となつたらしい。コスプ
レの経緯は何でも『ラウンドワンを一日遊び倒した謎のバンド』がモ
チーフだとか。一部SNSでは彼ら——怪獣優生思想の噂や目撃情
報が残っていたそうだ。

誰から見ても人目を引く彼らの格好はコスプレ向きと言えばその

通りで、殺し合う勢いで殴り合っていたガウマとジユウガを知っているだけに蓬は心中複雑と言えば複雑である。五千年前、まだ「怪獣」の何たるかが定まっていなかった頃ならば、こんな風景もあったのだろうか、ガウマとジユウガに扮して楽し気にカラオケに興じる二人の部屋を後にして、蓬と夢芽は先程のドリンクバー脇に戻っている。

「いてもいなくても人騒がせなんだよなあ、あの人……」

ぼやかずにはいられない蓬の隣で、夢芽も同様にしみじみと、

「ただの良い人だよ。私達以外にも、お節介してたなんてさ」

夢芽が太腿に残った傷跡をさする。蓬も右手の甲を見つめながら、五千年の時を経て蘇った怪獣使いのことを思い出す。通り過ぎる風のようにこの街を去ったあの人は、現代ですれ違った誰にとっても、何かを与えていなくなった人だから、彼を取り巻く特別な関係性を印す傷跡も、バイトで関わって来た人達も、きっと現代を生きたガウマの世界の一部で、ガウマ隊の外でも憎からず思われていた彼と仲間だったことが蓬には誇らしくて、自分達だけでも良かったのに、なんて思いつてもある。それでも知れて良かったと、そう思う。

「でも。ガウマさんらしいよ」

「うん。ガウマさんっぽい」

感慨に耽って、同じ言葉を繰り返す一時。ガウマが帰って来たのかもしれないという淡い期待を裏切られた筈なのに、思い浮かぶのは彼の快活な笑顔ばかりだった。彼が関わった誰の記憶にも、同じ絵が残っているんだろう。ガウマ隊に向けて真相を説明しようにも、過去と現在に気持ち揺れて定まらず、蓬は纏まらない言葉を夢芽と交わしていく。

「さつきちせちゃんが見つけた人も、ガウマさんの知り合い、なんだよね、たぶんだけど」

「愛されてるよね、あの人」

「そもそも忘れられるんじゃないし、インパクトだけはあから、ガウマさん。……でも、」

笑みを作っても、蓬の気分はどこか晴れない。ガウマは遠くに行くと伝えた時に動いた感情が、まだ胸に貼り付いている。ガウマとお

別れできなかったのは、蓬とて同じだ。時と共にその心持は変わっても、ガウマと関わりながら、未だ彼が同じ世界に生きていると信じてる人達もいる。希望はあっていい。蓬も心のどこかでそう信じている。

でも折り合いをつける最中の自分と違って、遠くの知り合いという距離のまま、ガウマの顛末を知らずにいる数少ない人達を、このまま無下にはしたくなかった。

きつとその人達も、ガウマの事をふと思い出したり、忘れてりするんだろう。

記憶だけの存在が知り合いから赤の他人になるまで、そう時間はかからないかもしれない。彼らの一人一人に、さっきの仕事仲間と同じことを伝え回っても、それをしなくても、行き着くところは同じだろう。余計な真似だと頭でわかっている、蓬はその事を考えずにいられなかった。

そう。

「余計な真似」だ。

ガウマに巻き込まれた誰もが、彼に対してそう思っていたのに、いつの間にか絆されていた。だから蓬の中で蠢く情動は、ただの納得を求めているに過ぎない。自己満足と変わらない。前の父親と住んでいた地域が怪獣に壊されたと知った時だって、そこまで背負おうとは思えなかったのに。自分は等身大に、この手で夢芽と手を繋ぐことが出来れば、それだけで良かったのに。守れるものは、守りたかった。

その手の範囲には、蓬の知らないガウマを知っている人達も含まれる。ガウマとの思い出も、蓬の一部から。その一部を抱えている人達が、それぞれの理由で彼を探し、彼に扮して街を彷徨い歩いているのなら——蓬は返した掌を握り込む。俺にしか出来ないことは、俺がやらなきゃいけないことだから、

「ね、夢芽」

呼び掛ける。今は恋人同士だけど、それより前から、ずっと肩を並べて共に戦った人へ。

夢芽と顔を合わせて、蓬は続ける。

「これから、付き合ってくれる？」

「……もう付き合ってるじゃん」

案の定お化けがむくれて蓬を睨んだ。言い方一つで地雷を踏みかねないのは承知の上で、あえて口にした彼女の決まり文句。これから蓬がなしたいことは、彼女についていったあの頃の再現に近い。

不機嫌を露わにする夢芽に向けて、蓬は言葉を組み立てながらお願ひする。

「そうだけど。そうじゃなくて。……たぶん、これまでガウマさんと関わってきた人、ガウマさんが世話になつてきた人達ばかりだから、厄介になつた分、また余計な真似とかしたのかもしれないけど……あの人が遠くに行つたこと、俺達しか知らないの、なんか、フェアじゃないなって。だからせめて、挨拶だけでもって、思つて。一人で探しても、見つかるかなんて、わかんないけどさ」

前置きは思つたよりも長くなって、耳を傾ける夢芽の顔から険しさが引いていく。

蓬は突き詰めた思いの丈をそのまま、彼女へと伝えた。

「俺だけじゃ、心許ないから。」

夢芽にも、来て欲しいんだ」

寶石の様に澄んだ緑が見開かれて、時が止まったみたいで静止する。思わず固まつてしまったかのような夢芽の反応は予想外で、蓬は視線を下げる。

「……夢芽？」

下から覗き込もうにも、夢芽は口を噤んで、深く俯いていた。揺蕩う感情を身の内で抑え込むかのように。そんな彼女の様子に、蓬は見覚えがあった。

彼女が抱えていた癒えない傷。振り返っても取り戻せない、姉を失つた過去の真相を探る過程で、夢芽が涙を流した夕暮れを、覚えてる。

姉の恋人にぶつけるしかなかった当て所のない感情が頬を伝う夢芽の姿は痛々しくもあつて、蓬はそれに寄り添えなかつた。まだ夢芽との間にあつた距離に、遠慮があつたのだと思う。叶うなら、自分が

側に居る限り、あんな風に泣く彼女をまた見たくはなかった。

けれど、夢芽は目尻を自分で拭うと、蓬の肩に寄りかかった。俯いたままの口元は、涙を堪えて引き結ばれていたりはしなかった。

微かに赤い眦で、夢芽は途切れ途切れに胸の内を零す。

「……何でもない。何でもないんだよ。……ただ、蓬が、香乃と……お姉ちゃん、同じ事言うから……」

蓬はその先を訊かなかった。彼女の心が落ち着くまで、ただ寄り添う。

「……うん、いとくから」

「……うん。ありがとう」

彼女の頭が肩に乗りかかる。今はその重さが大切だった。これから外に出ようとしていたのに、ここから離れたくないと思う。触れ合う肩。近付く手。かけがえのない不自由で、互いの掌を塞ぐ。

そのまま、永遠に時が流れたように思う。

過ぎ去れば、一瞬だったようにも思う。

ぎゅつと蓬の手を強く握り込んで、夢芽は顔を上げると、

「——行こう。二人で」

曇りの晴れた微笑みで、力強くそう言った。

「うん、行こう」

同じ力加減で、蓬はその手を握り返す。

カラオケボックスを出る際、『バトル・ゴー』と冗談っぽく夢芽が微笑った。

◇ クラス総出の打ち上げとくれば部屋を分けてもマイクの巡りは遠のくもので、完全に部外者の鳴衣にはそれが有難かったりする。まず他所のクラスの打ち上げに出ているというのが全くもって謎だが、それだけ学園祭当日何食わぬ顔で撮影係として教室を出入りしていたのが効いてたらしい。

撮りたかったのは1―3メンバーではなく夢芽一人なのだが、ホラーカフェと描かれた黒板をバックにクラスメイトに囲まれる親友の一枚絵はそれだけで後々涙腺にきた。なので此度の1―3からの誘いもその返礼を思えばやぶさかではなかったが、いじめられて遠巻きに人を見る側だった中学時代と比べると、遠くに来てしまったものだ。と年月の速さを鳴衣は感じるのだ。どこかの手のかかる娘さんのせいで、考え方までおばさん臭くなってしまった。元は夢芽と同じ高校に入れたことがこれ以上なく嬉しかった筈なのに、クラスが違って、関わる人が変わっただけで、こんなにも景色が変わってしまう。

〈今日抜けるから〉と素っ気なく書かれたメッセージが灯るスマートフォンを鳴衣は眺める。クラスに言いだすのめんどくさいからって全部投げ出しやがって。こちとら部外者なんだぞ——胸中に恨み節を留めると、鳴衣はしかめた表情を和らげた。きつと夜の都市に飛び出していく夢芽の隣には「南さん係」がついてくれているんだろう。その称号が「親友」と比べる物なのかはさておき、彼女が変わりゆく嬉しさと、離れていく寂しき両方ある。

そんな風に鳴衣が親友の成長を噛み締めていると、夢芽がいなくなった隣のスペースに座り込む長身の女子が一人。片側だけハネた黒髪と陽キヤの証(偏見)たるピアス。一度は突き返したトンガリ帽子を挨拶代わりにまた鳴衣の頭に被せ、制服の上魔女っ子ローブを羽織った金石が、冷めた目で口を開く。

「戻ってこないね、あの人」

「旦那と抜け出したみたいっすよ、あの放蕩娘め」

金石とは目線を合わせず、盛り上がっているカラオケの空気から一歩引いて鳴衣は答える。どうでも良いが夢芽の置き土産となったゴールドバーンのペイントシールを室内の人間の殆どが貼り付けた空間はハロウインの仮装も相俟って異様の一言に尽きた。金石と鳴衣のほっぺもその例に漏れないが、一応そこそこ自称進学校っぽい面目を保っているフジヨキ台高校としてはあるまじき姿かもしれない。

一体誰がこのような過激な象徴を夢芽に渡したのか？ 親友の交友関係をあれこれ詮索するつもりはないけれど、ちよつと心配になったりする。

「旦那言うなし。……盛大に振り回されてるなあ、蓬君も」

つまりなげにそう言つて、膝の上手首を合わせて頬杖を突く金石。左頬のゴールドバーンが手の甲に隠れる。彼女が属している彼氏兼「南さん係」こと麻中蓬が中心にいたグループの纏まりは、如何に蓬がクラスカースト上位のそつない人種といえど、夢芽の我儘を前にその形勢を崩してしまつたらしい。

鳴衣には他人事に過ぎないが、金石の想いも知っているだけにそこそこの同情もあった。手のかかる子ほどかわいいと言う身も蓋もない実情で、私が居なきや駄目だと思わせる引力が夢芽にはある。同性の鳴衣でさえそう感じるのだから、蓬の視界の中心はきつと夢芽で埋まり、その背景に流れてしまった不憫な子は少なからずいるのだ。恋つて理不尽だとしみじみ思いながら、鳴衣は愚痴に付き合った。

「片手どころか人の両手塞いじやうような子だからねえ、夢芽さんは」

「お姫様か」

「違うないねえ」

テンション低めの声量でも、不思議と何を言っているかは聞き取れる。なんとなく金石と同じようなポーズで頬を突いて、鳴衣も無心でモニターを眺めた。一曲が終わり、ずらりと次の曲が画面に表示される合間、金石は淡々と雑談を続けた。

「角井さんはどなの？ 南さん係卒業した気持ちは」

鳴衣は顔を顰めた。当の金石は素知らぬ顔をしている。彼女が麻中蓬をひっそり狙っていたことを鳴衣は知ってるし、金石はその逆に鳴衣と夢芽が親友であることを知っている。要するに近しい人間が離れていった境遇は同じなのだが、鳴衣は夢芽が前に踏み出すことを望んでいたのだから、そこには大きな違いがある。

しかしだ。食券タイプのお店しか入れず一人カラオケボックスにも行けないあのめんどろな親友の視界が今や世話焼きな王子様で埋まっていることを思えば、咄嗟に言い返せないのもまた事実。金石にあえて言語化されたせいで、失恋でもないのに胸に穴が空いた気分になる。親友の自由を望んでいたのは本心なのに、自分もかなり、夢芽に依存していたのだと、そう思う。

「次誰の番〜？」

アンニユイに沈む耳に飛び込むらんかの声。モニターの画面が切り替わる間に次の曲名を読み取って、鳴衣は反射的に手を挙げる。

「あ、私です。……すみません、マイクも一ついいですか？」

部外者ながら妙な自己主張で悪目立ちすることに若干の抵抗はあったが、鳴衣の口はするりと注文をつけていた。誰も気に留めることなくオーダーは受け入れられ、ソファの上の人から人を伝って鳴衣の両手にマイクが収まる。その片方を、鳴衣は隣に差し出した。

「ほれ、金石さんも。気晴らしに付き合ってよ」

じいっと貝になっていた彼女が目をぱちくりする。よもや鳴衣からこの様な申し出が来るとは思わなかったらしい。朱に交われば朱くなるというもので、中学時代にいじめられていた昔のままの自分なら、金石の様な人間には近付けなかっただろう。顔もスタイルもオーラも全部違う。でも学校内の曖昧な線引きで成り立ってる立場を取っ払えば、普通に普通の、恋に悩んでいた一人の女子高生でしかなかった。

金石が顔を上げてマイクを取る。掌に覆われていた左頬のゴールドバーン。鳴の右頬にもそれはある。なんだか鬱屈したものを開放した証の様で、それが目に映ると奇妙な高揚感があった。いつもの澄まし顔に疑問符を浮かべながら、金石が言う。

「……何入れたの？」

『うっせえわ』

「——乗った」

眉を吊り上げて彼女はマイクをしつかり握り立ち上がる。いい顔するじやんと口端を吊り上げながら鳴衣も腰を上げた。溢れるパッションに湧く室内。1—3の注目を一心に受けながら、鳴衣と金石は内なる怪獣を歌に乗せた。

——本当は、

本当は、夢芽と歌うつもりだった。

いつだってあの子は、内に秘めた何かを、鳴衣には話してくれなかったから。側で見えていて何かを封じ込めているのはわかるのに、夢芽自身言葉に出来ないそれを汲み取ることは難しくて。出来たのはこうして、偶のカラオケでストレス発散するくらい。中学で知り合った時から南夢芽は最初からそんな不器用な女の子だったから、それ以前の彼女を深く知らない鳴衣には彼女の物語を辿れない。それに触れるには、あまりに距離が近過ぎた。お互いがお互いに、出会った時のままでいられること。鳴衣と夢芽が相手に求めていたのはそれだけで、きつと彼女には、彼女の物語を紐解く為の他人が必要だったのだと思う。他人から友達に、友達から恋人に、色づく心と共に移り変わる関係性。

たぶん彼女は、最後まで鳴衣を巻き込んでくれなかった。

それが側に居れば居る程肌で感じ取れたから、鳴衣はその訳を訊かなかったし、彼女の心を彩る緑が芽生えていく過程を見守れた。時折茶々も入れたけど、不安の種に恋の芽を実らせた南夢芽は、以前よりも魅力的にカメラに映る。そんな彼女の特別な表情を瞳に閉じ込めるのは、あの麻中蓬という男子だけなんだろう。

苦労が偲ばれるのに、二人の時間や空間を正しく写真に切り取ることは、きつと鳴衣にだって出来ない。そんな野暮ったい真似をするつもりはないけれど、この夜に飛び出した浮かれたカップルに向けて、鳴衣は情動を歌に叩きつける。そうしないと隣の金石に場を持っていかれそうだった。浅く疼いた傷の熱を、誰が悪いわけでもないまま

言葉に換える『うつせえわ』。アイドルの引退ライブばりにボルテージは上がっていく。

そんな室内の熱狂など露知らず、カラオケボックスのドアを開くお客様が一名。

蓬が出て行ってグルーブ内の話し相手を失った淡木が隣の金石らの様子を覗きに来るのはそれなりに自然の流れであり、鳴衣や金石を筆頭に身体のところかしこに飛竜の紋様を刻んだ面々が鎖から解き放たれた獣の様に声を重ねていく光景が熱波となつて淡木を出迎える。ほんの数十分そこら部屋を分けただけでクラスメイト達に何があったのか？ 誰一人彼の来訪を気にも留めない異様な雰囲気にとだ圧倒される。

「こつわ……カルトじゃん……」

独り言はノイズとなり、奥のソファで並ぶ金石と鳴衣が牙を？くように淡木へと目を向けた。らんかやなずみ含めた1―3の片割れ達も一斉に振り向いた。ホラーカフェ&ハロウィン仕様の仮装と傍目にはタトゥーにしか見えない共通の象徴を印した若人達は、最早一体の怪物だった。

淡木、ゴルドバーン教入信五秒前。

マジで怖かったと、後に彼は繰り返し語る。



見渡す限り人波が押し寄せる繁華街を、彼女と離れ離れにならないよう強く手を握りながら雑踏に紛れる。人々の頭の高さで生まれた海原を掻き分けながら、カボチャやゾンビや何かのアニメのコスプレで思い思いに仮装した人々に目を配って、記憶にあるミイラ男を探す旅路。誰かの背中や肩にぶつかる度振り返っては夢芽の安全を確認する。人混みを抜けて人心地つく度、顔を合わせてお互いにほっと笑みを重ねた。

そんなことを何度も繰り返して、ガウマを知る人達の影を追った。手掛かりはちせの情報源。カラオケボックスを出た後彼女には事

情を説明して、今は搜索係を手伝って貰っている。元は彼女が見つけた写真が発端だった。何故あのような画像をピンポイントで見つけられたのかと問えば、帰って来たのは「見つかると探しました」というこの世の真理。ナイトさんと同じ人種だ——蓬にはないものを持っていて彼女の心強さに導かれ、偶然にも出会えたのは、二人。

一人は駅のホームで看板持ちのバイトをしていた、少々猫背気味で茶色の革ジャンを代用したガウマ二号。包帯増量でへそまで隠れ多少のアレンジが加えられたその格好の経緯を尋ねれば、以前同じパチンコスロット店で一日だけ働いていた如何にも不健康そうなミイラ青年と背格好が似ていたので、ハロウインにかこつけてその真似事を強いられたとのことだった。フジヨキ台高校に不法侵入して捕まった彼の武勇伝を蓬と夢芽がお返しに話せば、ガウマとは縁もゆかりもないその人は引き攣った苦笑を浮かべていた。

あの派手な髪色と奇抜なファッションでプラカードを持って街を走り回った一日は、店に錯覚させる程度にはそれなりの集客効果をもたらしたらしい。バイトの彼に再現を期待するのは少々酷な気もするけど、いなくなっても駅前陣取っているガウマの模倣の後ろ姿は彼の足跡みたいで、辿る足取りが軽くなった。

巡り合ったもう一人は、ガウマのルックスから打って変わって、全身がミイラだった。

駅前から戻る道で蓬達を呼び止めた包帯男は、蓬が以前ネットで調べた、ガウマと思わしきミイラと瓜二つの姿だった。彼は丁寧な物腰で、自身の所属とある考古学研究所の研究員だと明かしてくれた。

なんでもフジヨキ台イモセ市を中心に数多目撃されているミイラリスペクトのパンクな青年の活動範囲を絞り込み、研究所から行方をくらました某ミイラの復活を予感して、ハロウイン以前から身体を張って彼の事を探しているそうだった。駅前でプラカードを持っていた男性の外見は特徴こそ情報と一致しているものの、人違いで袖にされたらしい。その直後に蓬達が現れて、事情に通じていそうな立ち話の現場を遠巻きにしては、先刻から話し掛ける機会を窺っていたとのことだった。

永い眠りに就いていたガウマの格好そのままの研究員は包帯から覗く目だけ爛々と輝いていて、自分の代で生けるミイラと会いたいあまりハロウインに蘇ってみたようだ。変人ばかりに好かれてガウマが気の毒になるが、さしもの彼も包帯の上からではそれが自分のこととは気付きようもないだろう。研究施設の物品を投げ飛ばした怪奇ミイラ伝説を聞いてもないのに語り出した彼に、探している青年はめっちゃ貧弱だったことを伝えると、再三の空振りにミイラオタクの研究員は今にも灰になりそうなくらい肩を落とした。蓬達と別れヨタヨタ歩く後ろ姿が、やけにミイラっぽかった。

五千年前から蘇った竜使いの青年の息吹が、今も誰かの背中を押していく。

偶然に引かれて会えたのはその二人までで、彼女の手を引きながら、この夜に出会った人達のことを想う。きっとガウマと逢わなければ生まれなかった、彼を取り巻く関係性。

「変な爪痕ばつか残すんだもんなあ、ガウマさん……」

「結局、わかんなかったね。世の中で守らなきゃいけない、大切な三つ目」

「ね。ガウマさんと会ったことあるの、カラオケのあの人だけだったし。でも、案外いるもんだね、ガウマさんを知ってる人って」

あの高架下で暮らしていたガウマと、彼の過ごした日常が少しずつ重なっていく。朝の訓練から昼下がりの学校帰りまで、毎日の様に一緒だった筈なのに、ガウマ隊の隊長でもなく、元・怪獣使いの肩書も付き纏わない、生身の彼の足跡。怪獣がいるだけで日常を壊してしまうように、そこにいるだけで、人の懐に入り込んでしまうような人だった。彼の生きた記憶と記録を、夢芽と一緒に確かめ合う。

「がっつり馴染んでたよね、五千年前の人だけど。ガウマさんのバイト先も回る？」

また冗談めいた言い回しをする彼女に、蓬は笑い返して、

「しないしない。キリないって」

「蓬とならどこだっていよ、私は」

相手の芯を捉えるように凜とした緑の瞳が、ネオンのライトの下で

煌めいている。夕暮れに走るバスの中で彼女の輪郭を彩った、黄金色の景色と重なって、あの頃と変わらず側に居る彼女を、綺麗だと思う。ふとした時に何度も蘇るこの気持ちも、色褪せてしまう日が来るんだろうか？ 彼女と付き合ってから三カ月近く経つ。いい加減慣れたいのに、自分の心を奪った原初の風景を不意に目にすると、未だ頬の熱が冷めやらない蓬だった。

「……じゃあ、約束通り、このままデートでお願いします……」

顔を逸らしてそつと夢芽の手を握り、掌の温度を感じ取る。夢芽の視線がつぶさに自分の表情を観察しているのを何度となく思い知る。こんな時、顔と心の離れた彼女は決まって満面の笑みを浮かべているのに、赤面している蓬からはその表情が観測できない。それがもどかしくて、不公平で、蓬は心ばかりに手をぎゅつとする。言葉の代わりに、夢芽が握り返した。

「……お腹空いていない？」

「……空いたかも」

口実を作つて夢芽の方に視線を戻せば、いつも通りの低温な表情。連れ回した分の疲労は間違ひなくあるのだろう。人混みに紛れ、横断歩道の先にある街角のセブントウワンを目指した。

今夜は羽目を外した格好ばかり目にするせいか、平常運転のコンビニの風情に懐かしさすら覚えた。夢芽と曲がって自動ドアを潜り、見慣れた制服に奇妙な安心感。だが入れ違いになった客は煙草を片手にした背筋の真っ直ぐなゾンビで、コンビニを境界にした隔世の感拭えなかった。そんな現実と非日常が溶けかけた入店の一步目で、蓬達はレジで会計している知人を見つけた。

その人は、誰もが仮装に興じる中でただ一人、今し方仕事から抜けてきたかのようなスーツ姿で、前を開いて襟元も楽にした、何の変哲もない社会人の身だしなみでそこに立っていたからこそ、何一つ飾らないその姿がハロウィンで猶更目立った。

心構え抜きに、こんな場面で傍と出くわすと、失礼を承知の上で、蓬は思わずにいられなかった。

あのキノコヘアーからばっさり様変わりしたオールバック。人目

を引くには十分な長身を鎧っていたジャージを脱ぎ捨て、社会人然としたきつちりとしたスーツも、コスプレみたいだと思つてしまつても、今だけは許されたいと、ここにはいないガウマと共有したい心地で、蓬は会計を終えた彼——山中暦と鉢合わせた。

「こんばんは、暦さん。偶然——です、ね……？」

極普通の挨拶の流れだったのに、蓬は暦の引つ提げたビニール袋からポロリと顔を出していた品に目を留め疑問形に不時着した。それはあの高架下でガウマが得意満面の笑みでガウマ隊に振舞つてくれた食品、カニカマバーそのもので、計五本の本数が暦の動向を物語つていた。

手元に集まつた視線の意味を悟つて、暦はカニカマバー入りの袋を持ち上げると、

「偶然、じゃないかも……」

野放図な前髪に隠れることのない弱つた笑みは、真新しい苦労を刻み始めた壮年の顔で、実年齢よりも親しみ易いくたびれた風情が滲んでいた。ガウマと同じ目線に立つ暦の背丈が、今は大人らしく思えて。

飲食業に勤めている筈の彼がここになる不可解な事実には、バイト戦士蓬はかえつて冷静になり、

「——暦さん、仕事は？」

「抜けて、きちやいました……」

如何にもバツが悪そうに暦は目を逸らし、蓬と夢芽は開いた口が塞がらず、淀んだ空気が間に流れた。

手土産のカニカマバーは、漂う悲壮感を打ち消してはくれない。

コンビニの入り口から窓沿いに夢芽と蓬は並び、一人分距離を置いて暦が端に立ちながら、各々カニカマを齧る。正面で横断歩道を渡る人々が行き交い、歩行者信号が青く灯る度、目の前を人が溢れていく。コンビニを境に枝分かれしていく人の濁流。さつきまでそれに吞まれていたのに、口にするカニカマが夢芽の意識をいつかの高架下に連れていく。歩き疲れた夜には少々物足りなかつたけど、ガウマのことを考えることが多い夜には、ぴったりの食事。誰もが食べ終えたのを見計らって、暦が会話の口火を切った。

「二人は、ガウマさん見つけたの？」

此度のガウマ隊に奔った衝撃を、暦も既に把握しているのだろう。同じ連絡網を通しているのだから当然だが、搜索は人違いに終わり二転三転を繰り返している。共有している情報の齟齬を修正しようと、蓬が頭から状況を洗い出す。

「見ましたけど、あれ、ガウマさんのバイト先の人とか、ガウマさん知ってる人達が仮装してただけでした。もしかして、暦さんも今まで探し回ってたんですか……？ ガウマ隊のトーク、ガンガン進んでたと思うんですけど」

蓬の尤もな指摘に、暦は意気消沈のムードで答え、

「それね。……ちせがガウマさんの写真上げた時、行方知れずの友達に会えそうだからって、お店飛び出してきたんだけど、どうも勘違いっぽいって風向きが変わった頃には、俺、ここ着いちやってたから。引くに引けなくなっちゃって……」

「それってサボりじゃ……」

「結果的には……」

つい口を吐いてしまった夢芽の本音を、暦は溜息で受け流した。文化祭をバツクれかけた夢芽からすると親近感も湧くのだが、社会に出るとなると同じスケールで計ってはいけないことくらい夢芽にもわかる。

ガウマ隊の人数分用意されたカニカマバーの、余った二本が顔を出

したビニール袋。ガウマはいなかったと全て理解した上でそれを手にぶら提げた暦の真意までは、それ以上追及したりはしなかった。

「でも、その理由で早退許してくれるって、いいところなんですわね、暦さんの職場って」

蓬の自然体のフォローに、暦は目を細め、

「うん。人が良過ぎて、偶に辛くなるけどね」

「わかります、それ」

同じく蓬を視線で挟んで、夢芽も合いの手を入れる。

「なんで俺見て言うのよ……?」

ミイラの包帯の下で黄金色の瞳が困惑している。今暦に助け舟を出したように、彼の当たり障りない底抜けの正しさが夢芽には眩しい。暦にも同様の経験があるのだろう。ダイナゼノンに乗る時より、心は重なっていた。

「蓬は慣れたけど……どっちかっていうと、蓬の友達」

周囲にさざ波を立てない処世術のなせる業か、類は友を呼ぶを地で行くのが蓬という人間だ。蓬を囲む人種もまた、そこにいるだけで陽の気を発し、内から溢れるエネルギーを循環させるように輪を作る。恋人同士の蓬との会話は夢芽にとって日々の充電や日光浴だが、クラスメイトとの接触は依然その域には達していない。にも関わらず、クラスには既に、らんかを始め夢芽のめんどくささを理解しつつも突き放そうとはしない空気が生まれ始めている。それがグループの中心に立つ蓬の人柄のおかげなのか、彼に手を引かれるまま一歩歩み寄った成果なのかはまだ判然としないが、鳴衣と蓬だけで充分だった夢芽の世界に、これはちよつとした一大事。

合唱部の先輩達に訊き込み回った時のように、会うのはこれっきりという相手とのコミュニケーションは、短距離で走る時に呼吸を止めような気合いの収束に近いが、蓬達は息するようにそのエネルギーを発散していく。教室が同じ水槽の中だとして、泳ぐ深さが違うのだ。深海に適した夢芽と穏やかに群れる蓬達はきちんと棲み分けされていたのに、いつの間にか日当たりの良い海面まで連れ去られ、拳句打ち上げられる寸前まで来ている。鍛えていない表情筋で送るこ

れからを憂う夢芽の隣で、蓬は人の気も知らず笑い返して、

「じゃあ皆とも仲良くなれる奴じゃん、それ」

自分と上手くいつてるなら問題ないと、人としての粗のないその朗らかさが偶に腹立たしい。二人きりで花火祭りの話をしていたのに、皆を誘う流れになっていたあの時と変わっていない。一番質が悪いのが本人に悪気はない所で、淡水魚の如く澄んだ世界で育った彼を挟んで、夢芽は暦と死んだ魚の目を合わせる。

「こういうところですよね」

「だね」

「ここじゃ疎外感感じるんですけど……」

蓬だけががっくりと肩を落とす中、珍しく息の合った暦と夢芽は頷き合う。夢芽の気は済んだので、暦が後を引き継ぐ。

「どんなだったの？ ガウマさんの知り合いの人達って」

「普通の人達でしたよ。職場があって、友達がいて、偶々、ガウマさんと同じ場所で働いてたり、関係なかったり、皆、あの人の噂に巻き込まれてました」

ガウマのことがなければ、顔を合わせることもなかった人達。その点だけなら、ダイナゼノンに引き合わされたガウマ隊も変わらない。

「巻き込まれた」事実だけなら幾らでも文句のつけようもあるのに、そんな気分にはなれないのが、そのまま答えだった。ガウマ隊よりも、被害者の会の方が多いかもれない。顔も立場も知らない、ガウマの関わって来た人達に、共感や同情や言い様のない親近感を抱いては、夢芽は想いを飲み込んだ。暦は人ごみから知った顔を探すようにぼんやりと青信号を見つめて、

「そっか。そんな所にも爪痕残すんだ、あの人」

しみじみと消え入る低い声。誰に聞かせるでもない独り言じみた言い方が、くたびれた大人の横顔に映える。あまりにも様変わりしてしまった暦と並んでいると、いつの日か、ここではないコンビニの前で集まって、まだガウマのことを疑っていた頃が遠く昔に感じられた。話し合いの最中に他人事のように座り出したあの夜の暦と、スーツに身を正して背筋を伸ばした今の暦。勢いで職場を抜け出た目も

当てられない事実が、夢芽が見てきた山中暦の過去と現在を繋ぐ。彼の深い部分まで、夢芽は未だに知らない。ひよつとすると元・無職の大人という経歴が全てなのかもしれないけど、ガウマに巻き込まれた縁さえあれば、それだけで良かった。別れて三カ月が経つあの人の再会を期待して取る行動や選ぶ言葉が蓬と似てくるのは、やっぱり同じカニカマを味わった仲間だからだろうか、柄にもなく考えた。

「俺もさつき、夢芽と同じこと話してました」

暦のトーンに合わせて、蓬も気持ちを重ねて、

「ガウマさんのこと、友達って、同じこと言ってきたよね、私達も」

二人刻んだ足跡を振り返り、夢芽も言葉を重ねる。

特に打ち合わせもなくシンクロした台詞。改めてそれを確かめ合うと、蓬はパーカーのポケットに手をつ込みながら砕けた調子で笑い返す。

「言った言った。……でも、確かに俺達の間係を作ってくれたけど、友達って言い切るのもなんかしっくりこないんだよなあ、ガウマさん」

あれだけはつきりと口にしたのに、いまいちピンとこない表情で蓬は悩まし気に中空を睨んだ。ありふれた距離感を容易くラベリングしてしまえる普遍的な関係性の中に、見落としてしまうものもある。蓬がつついた違和感の種を、夢芽も自分の根っこから引き寄せた。

「あー……わかる。友達って、私にとっては鳴衣だし、ガウマさんはちよつと違うかも。一応、大人の人だったし」

ガウマとはカラオケも行かないし一緒にコスメ巡りもしない。訓練の日課として早朝や放課後は毎日のように彼の元に集まりはしたが、どれも遊びではなかった。そこには「怪獣と戦う為」という確固たる目的が常にあっただし、ちよつと緩めの部活くらいの方が、生活に組み込まれた手触りとしては適切かもしれない。

出会いからロボットや怪獣で四人もの人間の日常を一変させたのに、日曜日に休みを貰っていた律義さが振り返るとおかしい。そんな休日だって、捕まえた怪獣を逃がした日以外は、過度に干渉してこなかった。隊長なりのその線引きは、ガウマ隊それぞれの時間を気遣っ

てのものだろうか——考えれば考える程「友達」からは離れてしま
うのに、記憶は隙間なくガウマの事で一杯になっている。各々から見
えるガウマ像を擦り合わせるように、暦も意見を交えた。

「俺もその場の勢いっていうか、対面上はそう言った方が説明し易
いってだけで、向こうがどう思ってたかはわかんないけど……基本
上からだったし、訊いても素直に答えないんじゃないかな、ガウマさん」
恐らくはガウマと一番年齢が近いであろう暦の目線はやけに具体
的で、自分のミスに言い訳を重ねていたガウマの、怪獣に塗られた顔
が脳裏に浮かぶ。夢芽の目から見ても、余計な真似で突つかかって来
る割には突っ込まれると弱い、長所と短所がはつきりした人だった。
ガウマ隊を巻き込んだ手前、あの粗野な口調で「ダチ」という言葉を
使うガウマは、すぐにイメージ出来るよう出来なかつた。土壇場な
ら迷いなく言い切るかもしれないし、時と場所次第では、巻き込んだ
責任感から口ごもる可能性も有り得る。暦の言葉で三人とも、同じガ
ウマを思い浮かべたのだろう。夢芽が口にする前から、苦笑気味に
なっていた。

「戦う理由も、会いたい女の人の為だって、皆で訊かないと答えてく
れなかつたですよ。あそこでお辞儀するまで、割と本気で怪しい人
だつたけど」

五千年前から蘇つた怪獣優生思想。元は仲間でありながら、彼らと
は袂を分かつた訳を詰問すれば、その辺の蟹を喰つてバイトを口実に
そそくさ逃げる。怪しさもここまでくれば出る所へ出れるだろう。
更に問い質せば彼が戦う理由は、とても悲しい顛末から来る私情だつ
たけど、それでも、手を貸すには充分だつた。誰かに必要とされる火
をつけた熱意を、ダイナゼノンに乗った皆が憶えている。

ふと、夢芽は空を見上げた。都市の光に押し負けた夜空の星は薄く
点々としていて、星々が抜け落ちたみたいに地上は人で溢れている。
夜の帳が下りる度、ダイナゼノンで飛び立った宇宙を思い出す。世界
で唯一無職のままあの空を突き抜けた暦も、逃げ回っていた筈の大人
になって、この夜何を思うのだろうか？ 夢芽もあの頃はダイナウイン
グで舞浜までひとつ飛びで、そんな非日常が日常だつた。何かを失つ

た筈なのに惜しくないのは、ここに繋がりが残っているからだろうか
と、蓬の隣で夢芽は思う。

誰もが郷愁に浸るまま、蓬も思い出を数えていく。

「なのについてのかプール行つて、ご飯食べて、花火して、巻き込まれてるの当たり前になつて、怒つたり、怒られたりしてさ」

笑顔混じりに捲り直す一ページ。同じアルバムを辿りながら、思い浮かぶのは強面なのに気遣いに長けたお節介なあの人の事ばかり。そんな風に馴染むまで、そう時間は掛からなかった。初対面は命を拾われて蓬を追いかける汗だくな不審者というあまり関わりたくない第一印象。そこから輪をかけて相手にしたくないと痛感したのは、橋の上で蓬を待ちぼうけにさせて叱られた時。どう鼻屑目に見てもどうかしたのは自分の方で、ガウマの態度は一貫して正しかった。言語化出来ない心の澱から夢芽を掬い上げるように、暑苦しい距離感で説かれたこの世で大切な三つ。荒くれ者に見えて真摯なガウマの瞳。あの橋を渡る度脳裏に蘇る光景。うざつたくて仕方ないと無下にしていた事が、今になつて苦々しく感じられた。

「……めちゃくちゃ怒られた、私も」

あの場所に居合わせた蓬が側で微笑んでくれている事がせめてもの救いで、あの時、間にガウマが立たなければ、ここに一緒にはいないのだろうと、彼も同じことを考えている気がした。気のせいではない。ガウマと会ったことが人生の分岐点になったのは、曆もやっぱり同じみたいで、

「俺も、ダイナストライカー失くした時に。誰かに本気の怒られたの、いつ振りだろつて感じで。……自分のことより、俺達のこと見えたんじゃなかな、ガウマさん」

責任を問われ、己の失敗を振り返っているのにも関わらず、曆の横顔は優しい気だった。愚痴から反省会になつてるのに、誰も口にはしないありふれた感謝の気持ち。ここに本人がいないから、そんな湿つぽい空気にならざるを得ない。でも胸の内側は温かくなって、別れたことがまだ痛みにならない。実感がない、とも少し違う。染み入る余熱を、蓬は声に押し込めて、

「——友達じゃ足りない、か」

また一つ、大切な「わからない」が増えていく。

ガウマとの関係に答えが出ない事だけがわかったのに、誰もが何故か清々しい顔を浮かべていて。

振り返る程、ガウマの事が過去になっていく。

「また会えたら、美味しい蟹とか食べさせたかったんだけど。折角働いてるんだし」

期待していた可能性を名残惜しんで、暦が話題を未来に逸らす。その手に提げてるカニカマがガウマ隊の分なら、そこら辺のじゃない蟹は個人的な付き合いとしての想定だったのだろう。お酒も飲めるお店だろうか、ガウマと二人きりの暦がちよっと夢芽には想像出来ない。でも託されたダイナゼノンのパーツであるダイナストライカーをガウマに真っ先に返したのは暦だったことを思い出して、男同士の仲間もあったんだろうと察せられた。ガウマは蓬が渡した蟹煎餅を、ちゃんと食べただろうか？ ふと湧いた夢芽の疑問に被せるように、蓬の真つ当な問いが投げられた。

「暦さん、仕事始めたの最近からじゃ……」

「そこはほら、大人のカードで」

「絶対対にやめてください、マジで」

バイトながら社会的には暦よりも先輩に位置する蓬の全力の制止を抜きにしても、身近な大人のぼんやりとした態度は夢芽からして不安だった。カードでなくレシートで詰まった財布ならイメージ出来る。それ程までに元・無職に対する偏見は根深い。周りの気も知ってか知らずか、暦は何食わぬ顔で平然と続ける。

「いや、免許証の話。リボとか危ないのは流石に知ってるから。その辺の蟹よりかは、美味しい狩場探せると思うよ」

「現地調達から離れるつもりはないんですね……」

なんでだろう。ガウマならウキウキついて行きそうな気がした。まるで夏休みに虫取り網を持って飛び出す子供みたいだ。夢芽は呆れてそれ以上ものも言えなかったが、蓬は安堵するとすぐに要領よく、社交的な方向に切り替えていく。

「免許証、前から持ってたんですか？」

「取ったのは最近。橘さん……俺の雇い主んだけど、怪獣騒ぎの時酷い怪我したから、いざって時代わりに運転頼める人いると有難いって、就職前に合宿で」

ダイナストライカーで磨いた技術を現在も活かしている事を、暦は胸を張るでもなくさりりと言った。社会に参加する自然な流れに乗っただけで、それ以上でもそれ以下でもない漠然とした大人の通過儀礼。そうしたものを終えてここに立っている暦に、夢芽は少々置いていかれた気がした。さつきまで蓬を共に弄った仲間意識が溶けていく。これが焦りという感覚であることを、夢芽は深く思い知った。

「……なんか、ちゃんとしてるんですね、暦さん」

「言い方」

蓬の優等生な注意も今は耳に入らない。暦は自嘲気味に、皴の刻まれた目元と口端を歪めると、

「ちゃんとしてたら入社早々バックレないけどね……。俺からしたら、ダイナゼノン乗ってる頃の南さんの方が、ずっとしつかりして見えてたよ」

苦笑で流していた筈の大人の眼差しが、夢芽を捉えた。

「私が……ですか？」

予想外にも話題の中心になって戸惑うも、暦の声に偽りは感じられなかった。彼が思う程夢芽は盤石に生きてはいない。ただ片付かない過去に抗って、藻掻いている間に側に付いてくれた人がいた。同じ道を歩いてくれた蓬に一度視線を寄せて、夢芽は答える。

「必死だっただけなんで、あの時は。それに、一人じゃなかったんで」

コンビニの明かりの下、頬が仄かな朱に染まったミイラがくすぐったそうに笑う。丁度いいくらいの恥ずかしさで共に暦を見返すと、彼は顔を正面に向け淡々と、変わらずありのままを述べる。

「——出会えて良かったね、二人は」

その一言が、夢芽には胸が詰まるくらい、嬉しかった。蓬と目を合わせる。こそばゆさに緩んだ口元。きつと夢芽も同じ顔をしている。

だからなんとなく、その唇が次に読み上げる言葉も、夢芽には掴み取れた。一緒に暦の方を向いて、蓬が先に口を開き、

「暦さんも——」

「——ですよ」

同じ気持ちで、固く結んだ。

暦が目を見開く。カニカマのビニール袋を盾にするように口元の高さに持ち上げて、目を伏せる挙動不審。そんな年齢不相応な反応をする度に、知っている山中暦が浮かび上がった様な気がする。皴の目立ってきた三十路の顔が酒でもないのに赤くなる。観念する様にため息を吐いて、彼はカニカマを下ろした。

「……ありがとう。……凄いな若いつて。ガウマさんが青臭いこと避けてたの、ちよつとわかった気がする……」

「酷くないですか？ 今日の暦さんのこと、好きになりかけてたのに」

暦の隙を見てノリよく茶化す蓬。一気に年齢差の壁を踏み千切る辺りやはり夢芽とは人種が違う。しかしそうした陰キャ陽キャの差異に生じる自意識よりも、夢芽は別の理由でムツとした

蓬のパーカーの裾をビツと掴む。

生地が若干伸びる程度の力強さに、振り向く蓬へ夢芽は一言。

「蓬、

——私は？」

軽々に発した「好き」の重みを、今一度彼氏に問う。

決して、安売りしていい言葉ではないのだ。

例えその意味するところがあくまで前向きでピュアなもので、夢芽に限らずガウマや暦やちせに向けられても不自然でない使い方だとしても、彼女の前に使うには配慮が足りないと言わざる得ない。夢芽は言語化不要の感情を虚無の顔面に乗せて圧をかける。蓬の頬に、地雷を踏んだ冷汗が伝った。

「私は??? あ、え、はい。……みな、夢芽の、ことも……好きです、

けど」

下の名前で呼ぶよう散々しつめたのにまた名字で呼びかける。滅点。暦と夢芽を往復して彷徨う視線も忙しく、あの夜告白してくれたような男らしさは微塵もない。取ってつけたような答え方も到底満足出来なくて、夢芽は心を鬼にした。果たして自慢の恋人は、耳を真っ赤にしながらも、唐突に蚊帳の外で呆けた暦を一瞥して、勇気をかき集めるように深呼吸すると、

「や、大、好き、です……」

口を右手で覆って、穴があつたら入りたいと言わんばかりに地べたに目を落とす。耳を澄まさなければ聴こえない小声だったが、夢芽はばつちり拾っていた。及第点。滑らかに出る決まり文句。

「よく出来ました」

我知らず熱を持った頬は、身内の様なものとはいえ暦の前で大胆な真似をしたせいだろう。蓬の中で暴れる羞恥が遅れてやってきて夢芽はそっぽを向く。一部始終を見届けて、漸く暦が口を挟む。

「……何？ 今の振りだったの？」

「結果的には……」

「そこ否定しないんだ……」

若いつて凄いなと、眩い物を見るように、暦がもう一度笑いかけた。河川敷でガウマに追いかけられて一緒に走っていた大人の人が、今は実際に空けた距離以上に、遠ざかったように感じられて。

彼の通り過ぎた過去と、夢芽と蓬の今と。

憧れの下に隠れた傷跡に、口下手な姉の姿が重なった。

前に進む度積もる、密やかな寂しさ。

十月三十一日。死者と生者が廻る夜。おおよそ三カ月振りにけたましく鳴り響いていたガウマ隊の通知音も、鳴りを潜めて暫くが経つ。現地の蓬や夢芽の意向を汲んで捜索は打ち切りとなり、漸くSN S上からコスプレ隊長擬きを血眼で探すという気の触れた作業から解放され、肩の荷が下りた飛鳥川ちせがある疑念を覚えたのは、ガウマ隊の既読数が“4”で止まったのを確認してからの事だった。

この数字が正しいグループの人数分埋まることはない。それに気付いた時は胸が痛かったけれど、三カ月という時間は事実を淡々とした現実へ認識をすり替える。痛みに適応すると、そんな自分を冷たくも感じる。

この数字に対する感傷はわざわざ聞き回って確かめるまでもなく、ガウマ隊の誰もが感じているものだろう。着信の履歴だって、隊長の名前は段々下になっていく。電子の記録は雪みたいに儂い。消え去って忘れ去られるものと残ったまま忘れられるもの。どちらも大差はないけれど、疎外感としては後者の方が苦しい。それをちせは、実感として知っている。

そう。

疎外感である。

ここに欠けることを余儀なくされた数字がある。隊長は元より、近頃再就職を果たして顔を合わせてないちせの従兄弟もまた、遅れて既読を付けては反応がないことがままあった。数字の変動で生存を確認するのみで、従兄弟はすっかり社会の歯車に組み込まれてしまっていた。黙りこくっついては幽霊と何ら変わらない。ちせが隊長らしき人影の画像を送信した時だって、彼は既読スルーの沈黙を破らなかつた。おのれ社会人。そんなに仕事が偉いのか。それをわざわざ口にする程、ちせも子供ではない。あるのは緩やかな失望と寂寥だけ。

しかしだ。

蓬と夢芽の連絡も途絶えて久しい。

目下飲食業界に首輪をかけられた元・無職も浮上せず、数字の足跡を残すのみ。

「ここで、もしや——と、一つの閃きがちせを襲った。

『ガウマ隊』でなく、年の離れた従兄弟本人へちせは一報入れる。『先パイ、今どこっすか?』という素っ気ない一文にすぐさま既読が付く。短文で返って来るおおまかな居場所は如何なる偶然か、ちせが先刻までネットの海を介して調べ回っていた都内駅付近。ここに来てちせの根拠のない直観は確信に至る。簡素な文は更に流れ、

『蓬君と南さんも一緒にいる』

点と線が繋がったその瞬間、ちせの中で何かが切れた。

この悩みからちせを掬い上げてくれていた、頼りになる隊長はもうおらん。

チユツパチャップスを啞え込み、少女は夜の街へ足を繰り出す。

◇

齢三十三にして、二十一回もの面接で頭を下げ続けお祈りメールを送り返された後も、ここまで申し訳ない気持ちにはならなかっただろうと山中暦は思う。駅前広場に呼び出され、ガウマ隊一同横並びとなり、まるで死刑囚の様に沈痛な面持ちを伏せながら、顔半分にはスカルメイクを施した飛鳥川ちせのお叱りを待つ。

「ひどくないですか……? 皆して仲間外れにしてえ……私、今日一番働いてたつもりなんですけど」

「「ごめんなさい……」」

散々叫んだ開戦の号砲(バトルゴー)より重なる謝罪の意。それで一応は溜飲を下げてくれたのか、ちせはむすつと鼻を鳴らしては『宜しい』といった顔をする。暦が献上したカニカメラを一齧り、ジト目で順繰りに皆を見回して、

「南さんとよもさんは百歩譲って許します。私と分担してたんで……先輩は、なんでここにいるんすか?」

それこそが肝要なのだ、ここ一番で胡乱気なちせの眼差しが暦の顔にピタリと止まる。

「や、皆がガウマさん見つけたって言うから、仕事早退して、流れで」

「……それってサボりっすよね」

「そうとも言うね……世間一般には……」

手心のない評価を暦は甘んじて受ける。その上で、自分を気兼ねなく送り出してくれた社内の人達の事を思い出す。行方知れずの友達——他者にガウマの事を説明する時、自分から出たその言葉に自分で驚いたものだけど、怪獣災害の起きた社会には、上手に別れられなかつた関係性がごまんとある。だから暦の事情も、多くは語らずとも理解してくれたのだろう。けれど、返ってその優しさが痛かつた。

自分が周回遅れの人生に流されている間にも、大人になる過程で各々が培っていったもの。そうした正しさを既に持っている人達に囲まれていると、この先自分も同じものを返せるだろうか、押し付けられている訳でもないのに不安になる。

ところどころ抜けていたガウマの側が如何に楽だったか、社会に出て痛感する日々。

口にする程でもない取り留めもない思考。目の前を見ていない暦を引き戻すのは、肩を揺らした従妹の笑い声。

「駄目駄目じゃないすかっ。また無職に逆戻りですよ、先パイ」

「なんで嬉しそうに言うの……？」

背中から腰のやや上あたりをポンポンと叩かれる感触。いつ隣に回られたのかわからない。神出鬼没のちせの瞬発力は相変わらず縮地の域であり、嘲笑う少女の半目に見上げられて暦は溜息を吐く。

就活に精を出してからというもの、こんな風にちせに翻弄されるのも久し振りでいつそ懐かしい。戻って来たノリに釣られたのか、蓬も夢芽もさつきの謝罪ムードから相好を崩している。和んだ雰囲気で蓬が乗じる。

「ちせちゃんとも合流した事だし、これから歩いて回りませんか？

ハロウィン？」

「でも、そろそろ補導される時間じゃない？」

ほど良くマイペースに見えてきつちりしてる夢芽の提言。思えばガウマの緊急招集に呼び出された当日、あの日が日曜であったことはつきり物申したのも彼女だけだった。更に深く掘り返せば、前にも歩道の時間帯にとあるコンビニで集まった時、暦を「大人」という保護者扱いしてくれたのも彼女だけである。

スーツという社会人の称号を得た段になって、さりげなくスルーされている現実に暦は人知れず傷付く。日頃の行いが祟ったのか、大人や子供で区別することなく「山中暦」という個人として受け入れられている証拠なのか。兎にも角にも自分から言い出さない事には何も始まらず、暦は控えめに挙手する。

「大丈夫じゃない？ 大人ならいるわけだし。……一応、今は無職じゃないから。飛び入り参加するつもりなかったから、ハロウィンっぽくはないけれど」

高校生組の「その手があった」といった表情に複雑な気持ちを抱きつつ、暦は視線を右斜め下にスライドする。肩から倒れるように身を傾け、暦を見上げる従妹の眼差し。たぶん、自分が大々的に大人ぶることを、ちせは快くは思わないだろうと、そう予測していた。

予想を裏切り、何故だか爛々と輝いていたその瞳に、暦は一周回って恐怖を覚える。

いつもの如く見慣れたアームカバー——公の場では、未だその防御は健在のようだ——の下から、手品の如く隠していたのか、多種多様のメイク用品をまるでアニメや漫画で見る刃物使いの様に指と指の間に挟み込み、ちせは新薬が試したくて堪らないマッドサイエンティストのように生き生きと暦に言う。

「先輩、やっぱ私、仲間外れはよくないと思うんです」

「……お、お手柔らかにお願いします」

悲しいかな。従妹の前で染みついた条件反射と社会で揉まれた刷り込みは、断ることを許さない。

久方振りに従兄弟に振り回される感覚は就労に励む気怠さと比べれば些かマシで、遊んで貰っていたのは、寧ろ自分の方かもしれない——なんて、振り返るは子供部屋の日々。

今宵はハロウィン。

せめて今夜くらいは、このスーツが仮装に見えなければいいと暦は切に思う。

ここにいる少年少女の青春を守りたいなどという高潔な精神は持ち合わせていない。

ただただ金輪際、職質されたくない。

◇

一緒にいる理由が先にあって、誰も目的地は決めなかった。

出遅れを挽回するかのようになり、ちせが先陣を切り、蓬と夢芽は後に続き、暦がつかず離れずの速度で最後尾を維持する。前から顔面ハーフスカルメイク少女。ぐるぐる包帯ミイラヘッド、お化けの夢芽に続き、最後尾を死守するは、まるでガウマの目のクマのようにアイシャドウを塗った暦——ちせ曰くコンセプトはブラック企業で疲弊した社畜ゾンビという設定らしい——年齢も属性もバラバラな、河川敷の高架下から這い出た死者のパレード。

五千年前の魂の影に化かされた、夢現の黄泉路。

ちせと落ち合った駅前広場から出て、街道には溢れた人混みが十字路を境に別れた川の様になっている。人波の向こうで煌々と照る名の知れた家電量販店の赤い看板が一際目につき、そのはす向かいのビルで大々的に同じCMを繰り返す大型ディスプレイから散々流れる“うっせえわ”が段々お経の様に聴こえてくる。肩をぶつけないのが難しいくらいの人垣はイモセ市中の若者達を掻き集めたかのよくな有様で、やはり学園祭の比ではない。夢芽達とコンセプトが似たり寄ったりの格好と何度もすれ違い、舞浜で夢の国を牛耳っている住人達と見紛うような趣向も散見され、その中に最近破竹の勢いでお茶の間を圧巻する某鬼退治作品の特徴的な半々羽織や唐松模様も混ざって、国境を越えた閻魔の様に人々が蠢く都心。

「人すぎ……」

「ね。来た時より多くなってない？」

思わず漏れた夢芽の眩きに蓬が首を返す。すぐ前を歩く彼の声すら、手を繋いでないと遠ざかってしまいそうだった。いつぞやの色塗り怪獣が壊しかけたシヨツピングモール内のパニックが、歩く速度で延々と続く祭りの喧騒。一般道路を埋め尽くす人の洪水に押し退けられて、夢芽達は建造物の立ち並ぶ歩道を歩く。その道中申し訳程度の景観を保つためにポツンと生えた木立の下だけは、待ち合わせ代わりには人が立ち、通りがかる歩行者も避けて歩いていた。そこを一時の休憩所を選び夢芽と蓬は足を休め、いつの間にか後ろに押し流されていたちせもまた、息も絶え絶えに人混みを抜け出てきた。大人の脇腹の下でプレスされかけていた彼女は、息を継いで膝に手を突く。彼女は今し方抜け出た人の塊を見返して、

「はぐれないようにするだけで大変つすね〜……。あれ、先輩は？」

夢芽と蓬は四方を見回す。

小規模な円状のスペースを描く木の下に、見知った成人男性は一向に現れなかった。

「迷子じゃん……」

夢芽は蓬の声が重なった。誰であろうとはぐれる可能性はあったとはいえ、その誰かが暦であったことへの暗黙の了解。心配より落胆が勝ったちせの表情がガウマ隊における彼の立ち位置を物語っている。とは言っても一大事には相違なく、蓬が夢芽の手を離れて前に出た。

「俺、暦さん探しに行くから、二人は分かり易いところで待ってて」
首を返してそう言った蓬の眼前で、まだ彼の温度が残る左手を夢芽は見つめる。カラオケを出てから殆ど離れることのなかった掌。蓬が何かを察したように真剣な面持ちで、

「すぐ戻るから」

「お土産、待ってるから」

「あつさりしてんね……。暦さん以外期待しないでよ」

眉を下げて蓬が苦笑する。夢芽は温度の残る左手を後ろ手に隠して、自分よりも未練っぽい蓬の反応に心密かに満足した。

「お願いしていいですか？ よもさん？」

ちせが掌を合わせて蓬に頼み込む。首肯を返し、彼は渦巻く人垣の方へ走り出すと、

「うん——じゃ、また後でっ」

駆け出しながら夢芽の方に振り向いて、傷跡のついた手の甲を振り上げると、蓬は群集に吞まれていった。

控えめに手を振り返す夢芽の隣で、ちせは後ろ頭で手を組みながら小さくぼやく。

「こんななんなるんなったらもつと派手なメイクしときや良かったな……」

「……ただのスーツじゃ、見つけ難いよね、この中じゃ」

いつものジャージであれば暦の搜索ももつと容易かったのに。夢芽でさえそんな連想をする程あの緑は暦のシンボルになっているのだから、ちせも同じものをイメージしたのだろうか、チュツパチャツプスのステイックがはみ出した口元をおかしそうに綻ばせていた。

「この人混みで転んでなきやいいんですけど。初めてダイナゼノン出た時も、転んで逃げ遅れてたんで、あの人」

「暦さんが足早かったら、今どんなだったかな」

あらゆる偶然が交わったあの日をお笑い種に語るちせに、夢芽も他愛のない冗談を返す。そもその前提がひっくり返る仮定に、意味なんてないのかもしれない。ただの仮設に付き合って、ちせは夜空を見上げながら飴を口内で転がし、

「——まず就職してませんね、絶対。あと、私もあの子に会えなかったと思います」

後ろ手を背に放たれた言葉。思いを馳せる青い瞳。今も彼女の眼には、翼を広げた怪獣の友達が映っているのかもしれない。夢芽も同じ空を見上げてその光景を幻視する。自分を助けてくれたあの金色の飛竜の鳴き声が、『いつまでも引き摺ってんじゃねえよ』と、優しく言ってくれた気がした。

「じゃ、今が良いね」

ちせの横顔に向けて、夢芽は呟く。

「はい、今が良いです」

夢芽に視線を返し、ちせが答える。

秘密を共有した心地で二人微笑む。曆には悪いけれど、ちせとの距離が縮まった気がして嬉しかった。ゴールドバーンと邂逅したあの夜、無自覚の言葉や態度で、彼女を傷つけてしまったから。選んでダイナゼノンに乗っていた夢芽と、選べなかったちせとの隔たり。怪獣も戦う理由も失って、取り戻せたものがまた一つ。気にしているのは、自分だけかもしれないけれど、姉の影を追いかけている内に見落としていた大切な物を、これからも拾い直していきたくかった。

「取り敢えず、先輩達どこで待ちましようか？」

ぐるりと周囲を見渡しても、中学生のちせの目線では人垣を越えられない。踵を上げて背伸びをする彼女の隣で、夢芽もなんとはなしに視線を配る。ちせの頭を飛び越して目に入ったのは――遠くで人々を封鎖する様に、路肩に横付けされた一台のキッチンカー。

それこそ夢の国にありがちなポップな配色で、ハロウィンらしくラントンの飾られたその車の窓口から、店員が何を手渡しているかを夢芽は視認する。反射的に、人差し指はその方角に向かっていた。

「あそこ、行かない？」

「なんかあるんすか？」

寝かせた右手を額に翳し、夢芽の指した方に目を細めるちせ。彼女の目線からは、派手な車の屋根がギリギリ見えるくらいで、その全貌は掴めないだろう。夢芽は少し勿体つけて、その概要をちせに耳打ちした。

「――」

雑踏の中で確かに届けた魔法の言葉は、夢芽の手の内に籠ってちせの鼓膜を揺らす。

飴を転がしスティックを跳ね上げて、彼女がドクロ側の左頬を吊り上げた。

待ち合わせ場所の算段は遠く彼方、カニカマで埋まらない育ち盛り

の空腹に、夢芽は正直に従った。



祭りの人混みを避けながら最適のルートを探す感覚はバスケットのドリブルにも似ている。昔取った杵柄と言えば大袈裟だけど、人の隙間を縫って歩きながら、蓬は耳に拾う会話や雑音の中に紛れる細かな足音や、煌々と街を照らす電飾の下で行き交う仮装に塗れた人々の顔。五感を埋め尽くす情報が瞬きの合間に切り替わる。それくらい今の自分は早く歩いているのだと思うと、夢芽と手を繋いでいた歩き辛さが、かえって恋しくなった。一人の方が動きやすいとはいえ、女子を二人きりにさせてしまった危うさに今更思い当たる。ナンパなんてされてないだろうか——そう思うといっても立つてもいられなくなつて、暦の搜索に躍起になる。

この人入りで心なしか電波の繋がりが不安だったが、指定した待ち合わせ場所まで落ち合おう段取りは滞りなくついた。蓬が目指すのは某家電量販店の真つ赤な看板が目印のビルの真下で、入り口間際まで相変わらず人がごった返している。遠くからでも店の中まで覗き見れるように解放された店頭の間場には数段の階段があつて、そこを境に人の流れは途切れていた。ギリギリまで流れに巻き込まれないよう歩いていたが、最後にはもみくちゃにされた洗濯物のようになつて蓬は人混みを抜け出る。ふう、と一息つく、ひとまず暦と連絡を取ると耳元にスマホを繋いだ矢先、コール音が鳴ると同時に、自分と同じ動作を取る人影が段差を越えた真向かいに立っていた。パンダの目元の様な目の隈で、こちらを見下ろすゾンビと視線が合う。

「やっと見つけた……。行きましよ、暦さん。皆待ってるんで」
上段に一步足を掛けて、蓬は言う。暦はスマホを仕舞いながら、面みなさそうに頭を垂らし、

「ごめん、蓬君。……途中まで蓬君達の背中は見えてたんだけど、よそ見してたらつい……」

「そりやそうなりますよ、この中じや。何か気になるものでもあったんですか？」

暦の隣まで上がり切って、蓬は目線を合わせる。数段の段差を置いて見える景色は、やっぱり人の大海原と言う他ない。改めてよく歩いてきたものだ和我ながら感心しつつ、これから同じことを繰り返すのにもげっそりとする。他人と障害物の境目を失くした今、暦は目に留めたその何かを、形容しがたい物でも見たかのように、暫く黙り込んで、

「……うん、気のせいってどうか、ただの錯覚だったらいんだけど——」

暦の瞳は茫洋と、海に浮かぶペットボトルやビニール袋でも見つめるように、鏡の様に群衆を映している。その傍観はまるで落としてきたものを目で追うようで、手の届きようなない諦観が色濃くあった。囁くような声で、彼は独り言ちて、

「——ムジナさんと、すれ違った気がして」

暦が口にしたその音が、人名である事に蓬は遅れて気が付いた。

付随したイメージは、統一された白の軍服。思えば、蓬が名前を覚えるほど関わったのはジュウガやシズムくらいなもので、あれだけ怪獣を通して争い合った相手の事すら、既に記憶の底に埋没していた。暦が掘り返してくれた刺激に従って、脳は答えを探り出す。

「……ムジナさんて、怪獣優生思想の？」

「うん。の、女の人」

暦の首肯を受けて、やっと記憶が補完される。全体的にアイドルグループっぽいあの集団の中でも、とりわけ様になっていた一人。蓬は彼女と話したこともないけれど、暦にとっては、後ろ髪を引くくらいの相手だったのだろう。自分がシズムと決裂したように、暦にとつてのムジナも、また。

今宵はハロウィン。

皆が冗談を着て歩くような夜だ。

曆の錯覚の訳を、蓬は知っていたから、

「なんか流行ってるらしいですよ。あの人達のコスプレ。俺も夢芽も見かけたんで」

種明かしとしてはあんまりな解答に、薄っすらと目を見開く。反応が鈍いが、驚いているのは確からしい。溜め込んでいた期待や緊張を解いて、深く溜息を吐く曆。

「……じゃあ、気のせいかな。ていうか、流行るもんなんだ、あの仕事着？へえ……」

「それより早く二人と合流しましょう。ちよつと、夢芽に現在地聞いてみるんで」

原因はともかく、無事曆を探せたことをガウマ隊全体に報告する。携帯を手元に返事を待ち、現在地を割り出した一手間を置くにはあまりにも早いレスポンスでメッセージが返る。

それは言葉よりも雄弁に今現在の夢芽達の位置を告げる、一枚の写真。

派手なキッチンカーの前でチュロスを啜えたまま自撮りする夢芽と、共に頭を傾け合うちせ。カメラ目線でお祭りを全身で満喫した記念撮影に、蓬は一言。

「——いやわからんて」

ぼやいて、十数分振りに見る彼女の顔に、抱いていた不安は掻き消える。

ひとまず、楽しそうに何より。

◇

「めっちゃ砂糖落ちますねー、これ」

「でも、味はイケる」

「ですね」

色気より食い気な雑なレビューもそこそこに、夢芽は砂糖を零さないように黙々と口を動かし、残り少ななチュロスを食べ切った。チュールを貪る猫の様に一心不乱とした様子を横で観察されている事にも

夢芽は気付かず、チュロスの持ち手代わりの細い紙袋を二つ折りに置く。捨て場所を今すぐ探そうにも、人心地ついた後すぐに動こうという気にはなれない。歩道沿いに横付けされたキッチンカーの営業に差し支えない位置取り、ヘッドライトの真ん前で、夢芽とちせは並んで立っていた。車を避けて人の流れが二手に別れるので、切れ間になつたこの場所は正しく台風の目だ。目の前をめまぐるしく人が入れ替わり、景色は一時とて留まることを知らず、名前の知らない人達の顔は捌き切れないただの情報として背後へと流れていく。彼や彼女から見た今の夢芽達も、背景の様なものだろう。この街にこんな人がいたんだと、ひしひしと肌で実感する。

ガウマが、ダイナゼノンに乗った自分達が、ほんの少しでも守れたもの。

頭でそう考えても、夢芽の視野では上手く結びつかない。あの頃、自分は自分の出来る限りの事をしたただけ。偶々怪獣が出てくる世界で、偶々怪獣と対抗する手段を手にしただけ。怪獣という不条理の下で、何もかも手遅れになつてしまわないように足掻いて、あの高架下に通うことは、ともすればただの学校生活よりも居心地が良かった。とどのつまり、自分の為だ。誇らしげにふんぞり返つて、ここですれ違う一人一人に、『私があなただを守りました』等と、恩を着せるものでもない。——守れなかつたものだって、たくさん、あるだろう。ほんの三か月前までの自分が他人みたいで、人で溢れた地平線はすれ違う背丈の差分凸凹で、この中にいると自分という個が埋没する。ダイナゼノンやダイナウイングから見渡す景色の見晴らしが、今となつては懐かしい。きつと空からこの地上を見下ろせば、広がる人の濁流は街の網目を走る墨汁みたいになつて、隅々まで埋め尽くしているのだろう。今手元にあの赤い愛機があれば、その景色を眺めるのも一興かもしれない、なんて突拍子もない発想は、一滴の感情に打ち消された。

この息苦しい地上じゃないと、蓬に会えない。

夢芽がここに立っている理由は、それだけで充分だった。

時間の許す限り脳裏を巡っては掻き消える取り留めもない思考。

ふと隣を見遣ると、ちせはチュロスを食べ切って残った紙包みで、折り鶴を作っていた。指先で摘まめるような小粒な代物である。手先の器用さを遺憾なく発揮しながら、掌にちよこんとそれを乗せて水平に視線を合わせる彼女の表情は渋い。「絶対良い写真撮れたと思ったのに」と後で悔しがる鳴衣の様だった。夢芽が良い写真だと言っても、頑固な友人は自分では納得できなかつたりするのと同様に、ちせもその出来栄えに満足していないのだろう。彼女が折り鶴を作っていられるくらいぼーっとしていた事に夢芽は遅れて気付いて、蓬や鳴衣と一緒に居る時も、こんな風に放っておかれておかれている事がある。贅沢者だなど、今更ながら思う。周りの人に、少し恵まれ過ぎている。没頭するちせに向けて、夢芽は口を開いた。

「そういえば、ちせちゃんを作ったゴールドバーンのステッカー、うちのクラスに配ってきたけど、結構ウケてたよ」

報告を受けて、ちせの目の色が輝きを帯びた。ついで彼女が苦勞して作っただろう折り鶴は。本を閉じるみたいにパターンと潰された。納得がいかないなら壊す事も辞さないらしい。いともたやすく行われた破壊と不釣り合いな笑顔を添えて、彼女は手を合わせたまま、身体ごと夢芽に向き直って、

「ホントですか?! あざます南さん!! ……え、よも、さん、じゃなくて、南さんが配って来たんですか? 自分のクラスに?」

爆ぜるようだった笑顔が疑念に上塗りされ、喜色に彩られた半面髑髏が訝し気になる。『だよね』と、夢芽は思わず言いそうになった。元よりちせはそうした外交的な役割を蓬に頼んだのだ。蓬のブレザーを夢芽が借り受けなければ、あんな展開にはなっていなかつたろう。今も白装束の上に纏うその学生のシンボルに、思わず手をかける。肩のあたりを掴んでいると、なんとなく蓬をそこに感じられた。成長を見越してやや広めの、わかりやすい異性のサイズ。この身を包む安心感は、果たして大ききのせいだろうか。彼にも、ちせにも、ゴールドバーンにも、また助けられている。重なった数多の偶然で、引き摺らない程度にクラスメイトにいじられてきた過去を、夢芽は前向きに受け入れた。

「そのつもりなかったんだけど、偶然そうなったっていうか。……でも、クラスで話すきっかけになったから。ちせちゃんにお礼、伝えときたくて」

「……なんか変わりました？ 南さん？」

ちせが上目遣いにこちらを覗き込む。変わった、という程の感触は夢芽自身未だない。そういう流れがあっただけで、明日から急激にクラスと仲良くなれる訳でもないだろう。……学祭の準備くらいは、真面目に出た方が良かったかもしれないと、思い直しつつもあるけれど、表面的にはいつも通り装う。

「……まあ、贅沢ばっか言ってるんじゃないし」

ぷいっと顔を逸らし、ちせを一瞥してから遠くに視線を投げる。下手に繕おうとして、逆に意味深になってしまった。咄嗟に出てきた言い訳も、ちせと夢芽の間でしか通じない言葉。ちせは一瞬きよんとして、「可愛いところあるんすね、南さん」とくつつくつ笑う。鳴衣二号に見つかった気がして、夢芽はいたたまれない。年下にまで手玉に取られたら、自分の居場所はどこにあるう？ あとでもつと蓬をからかう。滅茶苦茶贅沢しようと、夢芽は固く胸に誓った。

ふしだらな内心を悟られまいと、夢芽はちせに向き直り話題を乗り換える。

「ちせちゃんこそ、あれで良かったの？ ……ゴールドバーンって、ちせちゃんだけの友達じゃ」

高架下でのステッカーを受け取ったあの時から、実は引っ掛かっていた。

ゴールドバーンという怪獣を、唯一人『最高の友達』と呼べる女の子。それは飛鳥川ちせ一人であるべきで、他の誰にも譲れないポジションだ。夢芽にとつての鳴衣のような、替えのきかない関係。そう思っていた。

夢芽の問いを受けて、ちせの表情から笑顔がふっと消えた。一泊の間を置いて、彼女は芯の通った声で言い放つ。

「——南さん、最後の怪獣と戦った時の動画って、ネットで見たことってありますか？」

「……ない、けど」

唐突な質問に遅れて返す。ちせが言ったように、怪獣やダイナゼノンの戦闘の記録がネットのそこかしこに残っている事自体は知っている。ガウマが初めてダイナゼノンを起動したあの日から、クラス中もその話題で持ちきりだったが、対岸の火事というべきか、被害の場所が遠くなる程、野次馬に火を点けて繰り返し再生された記録達。当事者の夢芽が小耳に挟んだのも昔の話で、自分からわざわざ好んで見る類でもないのだから、今の今まで忘れていた。

夢芽を一瞥して、ちせは両腕を真上に伸ばし、子供の手遊びのように掲げた両手をピストル型にして、カメラのフレームのように指を合わせる。夜空から一点の流れ星を切り取るかのように、ピントを夜の一転に。まるで今尚ゴールドバーンが飛び回っているかのような親愛の仕草を宙に捉え、彼女は口を開いた。

「あの子も映ってたんすよ。やってることはダイナゼノンの味方ですけど……見た目怪獣だし、結構心象とか分かれてて。怪獣のいない世の中の方が正しい、ってことですかね、やっぱ」

カメラの枠組みを解き後ろ手に回して、思い詰めるように目を伏せた。彼女が戦っているもの大きさは計り知れなくて、怪獣の友達から見える世間の冷たさに、夢芽は言葉を返せなかった。

誰も、見た目には抗えない。

怪獣優生思想に「怪獣擬き」と呼ばれ続けたダイナレックスにしても、いわれのないそしりは受けたのかもしれない。人々の目線で見れば、怪獣使いも怪獣擬きも、蟻を踏み潰す象に変わりないのだから。加害者か守護者か、怪獣を審議する世間の心まで、夢芽には掴めない。

唾えた噛み砕きそうな程にちせの表情は張り詰めていて、それでもその小さな肩に乗せた重りを跳ね飛ばすように、彼女はもう一度顔を上げる。ゴールドバーンがかつて翼を広げたフジヨキ台の空を見て、その目はまだ死んでいない。世間の視線に晒されて、俯く生き方の正しさを知りながら、最高の友達の明日を憂う少女は、雑踏の中誓いを立てるように、空へ本音を吐き出した。

「このまま忘れられた方が、たぶん平和ってことになると思うんで

すけど、んなわけあるかつ！……って、私なりの悪足掻きです、あれは。地元の悪評くらい跳ね飛ばさないと、あの子が安心して世界飛び回れませんから。

……だから、南さんに感謝です。でっかい貸し、出来ちやいましたね」

照れくさそうな振りで、誇らしそうに破顔して、やり切ったように俯いて。

彼女の前で、『器用な人なんていない』と、考えなしに口にした事がある。訳アリのアームカバーですつと何かを隠したまま、制服を着ない年下の女の子。そうした認識が覆ったのは、夢芽が自分にしか構えなかった身から出た錆で、彼女との関係を他人事に置いたまま、また考えなしの言葉を投げた。水門の上、夜風よりも強く耳目を引いた彼女の本音。俯いている夢芽よりも、ちせはずつと先を見据えていた。その小柄な体躯よりも、心の根を伸ばして。

飛鳥川ちせとは、抱える弱さも、蹲る場所もきつと違う。

それでも彼女の方が、時折自分よりも大人に見えて、彼女に想われるゴールドバーンを、幸せ者だと思う。例え怪物が世界中の悪者でも、ちせだけは、彼女の正義の味方なんだろう。そうして自分で選んだ生き方に、憧れる。

——ふと

姉が夢芽に抱いた「憧れ」も、こんなものだったのだろうか、夢芽は思う。

姉は、南香乃は、家族や周囲に合わせられる小学生時代の夢芽の事が、羨ましかつたと言っていた。気付いた時にはいつの間にか開いていた姉との距離感。姉の目に映っていた夢芽の事が、夢芽には自分の事ではないように感じられた。きっと姉の見方が変わったのは、十代の環境の変化もあるだろう。姉が抱いた羨望や憧れはそのまま、学校生活が上手いかなかった自身の歯痒さの裏返しでもあって、姉はそれにずっと抗っていた。乗り越えようとしていたのだと思う。その為の約束だった。約束を乗り越えられずに、別れた姉の本心を知らなかった頃、自分でも言葉に出来ないくらい悲しくて、その真相に手を

伸ばす程に、姉を取り巻く合唱部への疑心は募って、何もしてあげられなかった姉の恋人に怒りを向けて、腫物のように過去に置き去りにされていく姉が不憫でならなかった。自分が探していたのはこれだったのかと、何もかも見失ってしまうくらいに。

姉の死が——ただの事故だったのなら

憐みも怒りも、事実を捻じ曲げる材料にしかならない。近付いたと思えば思う程、きつと姉の本心から遠ざかっていた。姉が、香乃が夢芽に抱いていた憧れだって、恐らくは本質は似ている。見えているものはどうあれ、見たいように見えてしまう心のフィルター。ちせに感じた憧れを認めて、夢芽はじつと彼女を見つめる。

俯きがちだった彼女の背筋は、つい前よりも凛と真っ直ぐに伸びている。戦う武器になるという意味じゃなくて、同じ目線でずっと一緒に戦ってくれていた少女。あの水門の上で、彼女を突き放すように傷つけた。

彼女はそれを『傷』と呼ぶほど、やわな人間ではないかもしれないけれど。

殴った手が痛むように、言葉の刃は人を突き刺す。姉の約束が、呪縛になってしまったように。

『もつと、仲良くしておけば良かったね』

過去に戻って、水門の上で抱き留めてくれた姉の声が、聴こえた気がして。

そうだよね——声にならない声を返す。

お姉ちゃんとは、あの一瞬しか叶わなかったけれど。

ちせとはまだ、同じ時間を生き続けている。彼女との関係が、友達と呼べるものかもわからない。ガウマ隊の繋がりが途絶えてしまえば、それつきりかもしれない。最高の友達に誓いを立てた今のちせも、器用には生きられないと漏らしたいつかの彼女も、どちらも本当なら、夢芽は今度こそ、喪ってしまった姉の様に、近しい誰かを遠ざけて見たくなかった。飛鳥川ちせはもう、他人じゃないから。

「いいよ、貸しなんて。……ちせちゃんはもう、関係なくないから」
いつか傷つけてしまった言葉に重ねて、夢芽はちせを見つめる。

『ありがとう』も『ごめんね』も、タイミングを逃すと難しい。聡明なちせには、すぐにあの夜の情景が思い浮かんだのだろう。夢芽の器用じゃない謝罪を、彼女は一泊遅れてくしゃりと笑って受け止めた。通じ合った感触に、ほつと一息。勿体付けた言い方に、今更湧く羞恥心。言つて良かったと自分の勇気を褒めるには、夢芽の経験値はまだ足りない。気恥ずかしさを隠すように俯くと、ちせの手が目線を潜って、

「南さん、これ、良かったら」

包み紙に巻かれたチュッパチャップスを差し出して、既にちせの口には新しい一本が咥えられている。自分の分を取り出したついでの流れでも、彼女が気を許してくれたように思えて「……ありがとう」と声を小さく夢芽は受け取る。包み紙を外して現れた飴玉は、ピンクにも紫にも見えるブルーベリー味。香乃の色。それをそつと口に含んで、ちせがよくやるように噛んでみる。半端な力で動かした顎で到底噛み砕くこと叶わず「かった……」と夢芽はぼやき、ちせが軽く吹き出す。つられて夢芽もおかしくなって、甘さの広がる口元を一緒に緩めた。

折角彼女との距離を縮めたのに、唐突に夢芽のスマートフォンが鳴り響いて、

「よもさんからですか？」

ポケットに手を差し入れる間にちせの関心もそこに向く。夢芽も同じ見立てで通知に目を走らせるも予想は外れて、『鳴衣』と親友の名前が並んでいるだけだった。どうも夢芽充てに画像を発信したらしい。他所のクラスの打ち上げに音を上げたか——夢芽は無心で指を動かす。

「んん、友達から。」

——うっわ……」

連投された画像に思わず呻く。

ありふれたカラオケボックスの一室。クラス内で出し合った予算内に収めたジャンクフードが並ぶテーブルを真ん中に、それを囲むクラスメイト達がソファの上で笑っていたり、奥でマイクを持った誰かを囁し立てている光景。画面端にはすっかり板に付いたナースコスで

お腹を抱えているらんかがいる。その隣で夢芽の見たことのない笑顔を浮かべている鈍眼鏡との距離感には彼氏彼女のそれであり、目に入る誰も彼もが頬にゴールドバーンを刻んでいる。羽目を外した高校生達の中心に立つは、挑戦的な目つきでこちらを睨んで舌を出す鳴衣の自撮りであり、彼女と顔をぶつけそうな程近くでピアス女もマイクを握って舌をペロリと出していた。

おかあさんがグレた——夢芽はそう思った。

鳴衣が、中学からの親友が、自分以外とこんな顔をするのが意外でならなくて、いつも澄まし顔で優等生っぽいピアスの子も、ゴールドバーンのペイントで不良に見える。進学校の生徒達の自由な素行は“怪獣”という象徴の下で熱に浮かされた信者のようでもあり、ドン引く夢芽の手元を側から覗き込んで、教祖ちせが訝しむ。

「……どこのカルトっすか？　これ？」

「うちのクラスだけ……」

身内の恥を晒しながら二の句も継げず、夢芽は固く口を閉ざす。

「……遅いっすね、先輩達」

ちせはそれ以上触れなかった。

やっぱあの子、私いないと駄目だ——見て見ぬふりの沈黙が痛い、取り返しのつかない夜。

曆を連れ戻し都心の雑踏に逆らうようにして、蓬は眠る事を忘れた死者の夜に入り交じる。目まぐるしく視界をすれ違う人の顔という顔はもう、情報の群れとなって男女の見分けくらしいしつかない。ひっきりなしに聴こえる雑音は人々の話し声に留まらず、横切る商業施設のアナウンスや客の呼び込みで四六時中鼓膜を揺らされる。つい最近学園祭を終えたばかりだからか、スケールの差に圧倒させられた。

こんな夜なら、打ち上げから別れた1―3の面々が近くに居たとしても見つけることは出来ないだろう。それはこれから合流する夢芽やちせにしても同じ事で、ガウマ隊全員が落ち合う場所はお馴染みの連絡網にて、駅前には鳥居の如く構えた歩道橋に定めた。

ビル街に挟まれたそこは三叉路を形作るように人が溢れ、絶え間なく都心の大口を開けている。蓬の通学路に横たわる河川のように、人が流れ出しているのか流れ込んでいるのかも最早判然としない。

逐一曆とはぐれていないか振り返り、案の定人混みに足を取られている長身瘦躯の姿は、ちせの施したやつつけ社畜メイクのおかげもあって容易く発見出来た。仮装に溶け込む為の目の熊は意図せずともいなくなつたあの人の顔を蓬の胸に去来させるけど、ハロウインの定番らしく最早見慣れた魔女や吸血鬼や神父や狼男やら、浮かれた霧囲気の奔流に寂寥は押し流されていく。

曆がはぐれた原因となつた、怪獣優生思想の軍服は、ついぞ見つからなかった。

何か取り零したような、後ろ髪を引かれた気分でいながらも、足は目的地の歩道橋に辿り着く。階段を一段一段と自分の足で上がっていく当たり前の感覚は、なんとなく、小さな怪獣を探しに練り歩いた、いつかの跨線橋の風景を思わせた。あの時カツンと空虚な音を鳴り響かせて、蓬の方を振り返りがてら腰に差した物騒な得物を鉄柵にぶつけた、おっかなくてどこか抜けた異世界からのお客様は、今頃どう

してるだろうか？ 人相は兎も角、出で立ちだけなら今日の都心に集まった人々の方が彼よりもよっぽど異世界で、仮に彼や、彼と共にビジネスパートナーの如く世界を駆け回るミステリアスな女性が今夜のフジヨキ台を視たら、何を思うのだろうか。怪獣だらけだと、大真面目に対処するんだろうか。ふとした想像に可笑しく思いながら、蓬の視線は駅の全貌を視界に収める所まで上り詰めた。

働き口のスーパーマーケットの繁忙期を凌ぐ賑やかさで、下手な商業施設よりも幅広に目に映る都心の駅と、それを囲む煌びやかネオンに溢れた街並み。それらを眼下に置きながら、歩道橋の真ん中に並び立つ夢芽とちせを見つけ、蓬の旅は終わりを告げた。

「あつ、センパイ、よもぎーん、こっちつすよこっちー」

柵に両腕でもたれかかっていたちせが片腕で器用にバランスを取り細長い手を伸ばす。同様に蓬や暦も手を振り返しながら、ちせよりも奥に立つ夢芽は横目の視線を送り返すのみ。そんな塩対応にさえ、今は安心を覚える蓬だった。

蓬を迎えるようにちせが前に立ち、掌を合わせて「あぎます！ よもさん！」と綺麗なお辞儀をした。恭しく垂れた頭を上げると、露になるのは左眼の周りを黒く塗ったスカルメイク。顔半分が不健康な白い肌の口元は、骸骨の歯並びを？き出しにしているけれど、元のちせの愛嬌や礼儀正しさ、その唇をはみ出した飴玉のスティックのせいにかちつとも怖くはない。いざしかし、中学生とはいえど公私を分けて振舞える程度には彼女は大人で、蓬の後ろに立つ暦の方へ詰め寄るや否や糾弾の口火を切った。

「センツパイ。駄目じゃないっすか保護者が離れちゃ……私と夢芽さん、今の今まで補導対象でしたからね。言い出しっぺなんだから、責任は果して下さい」

「返す言葉も御座いません……。ごめんね、南さんも。余計な時間取らせて」

傍から見れば成人男性が少女にこっぴどく叱られている気の毒な場面だが、こと暦とちせの間柄としては日常茶飯事だったりする。夢芽もちせの駄目押しに乘せられたように、挨拶代わりに一言、

「いえ、蓬返してくれたらそれでいいです」

「……と、仰ってますが」

「包み隠さなくなってきましたね。らしいっちゃらしいですけど」
蓬を挟んで始まる井戸端会議。いたたまれない頬が仄かに火照る。

「そこ、従兄妹トークやめてください……。麻中蓬、ただいま戻りました」

「蓬はもう少し、学校でもいじられてていいと思う」

「貴女と付き合い出して倍からかわれてんすけどこっちは……」

「そう？ 蓬は兎も角、ちせちゃんとは並ぶと、暦さんもあまり変わらないですね」

「元からそんな変わった気はしないんだけど……。ナイトさんには、最後まで顔覚えられてなかったみたいだけど……」

「センパイも変わるとこは変わってますよ。ブイブイ乗り回してま
すもんね、2代目ダイナストラライカー」

十字を描くように四人向き合って、何故だか久しぶりな気がしない
中身のない会話。橋の上を行き交うハロウインの住人達を視界の外
にして、蓬達は集まりを形成する。免許を取得したらしい暦は若人の
羨望を一心に浴びて、居心地悪そうに明後日に視線を逃がした。

「二応、社用車ね……。それに、2代目でもないよ。ダイナストライ
カーは、ガウマさんに返したんだし」

見上げる夜空彼方、真紅の竜を探すような眼差しで、暦はその名を
口にした。

「2代目って言ったなら、今どうしてますかね、あの人達」

この歩道橋を上る際も、頭の隅にあつた心強い人達の事を、蓬も想
う。

「あの二人と世界中回ってたら、いつか目覚めるのかな、ダイナゼノ
ンも」

夢芽もまた曖昧な未来に思いを馳せて、温度を秘めた声音で目を伏
せる。

「起きたらその辺のカニ食ってたりして」

盆を返すようにちせが茶化して、きつとここにいる誰しもの脳裏に

あつたのは、自分に不器用で他人にお節介な「彼」の背中。

都市の中心に立つような歩道橋の上、見渡す限りのビル群や四方を囲う商業施設。瞬く間に画面の移り変わる屋外用のLEDビジョンよりも高く遠く、この地を駆け抜ける機械仕掛けの巨人の中に、蓬達は乗っていた。それだけの出来事がありながら懐かしむのは、あの河川敷で過ごした他愛もない思い出ばかりで、皆にカニカマを配る記憶の中のあの人は、あの強面で笑っている。自分の分は平らげた後で、その辺の蟹に目移りしながら気丈に振舞う、蓬が呆れ混じりに慕う大人は、そんな人。

「それじゃきつと力出せないよ。足りない分は、誰かと補えたらいいんだけど」

労働の代償を噛み締めてか、暦の言には実感が伴う。乗り手の心が一致しなければ燃費や動力にムラのあるダイナゼノン——ひいてはダイナレックスの事だ。行く先々で困難に見舞われるのは想像に難くない。

今はまだ、雲を掴むような話でも、

「……もしも誰かが必要なら、その時は、」

蓬は、空いた右手を見つめる。

ダイナソルジャーを握った手だ。

怪獣を掴んだ掌だ。

夢芽と、繋ぎ続ける事を選んだ手だ。

「……蓬？」

怪訝と自分を覗き込む夢芽に視線を返す。

何かを掴むという事が、何かを掴まないという事で、幼い頃蓬の父と母が離れたように、時として選ばざるを得ない日は訪れる。あの頃、小さな子供でしかなかった蓬には選びようもなかった。子は鎧なんて言葉も辞書から抜け落ちたように、蓬が両親と手を繋いだ過去は過去のまま、深く記憶の地層に埋もれていく。母は新しい相手を選んで、実の父は冴えないけれど優しさを損なわずに、交わった人生は各々の道へと通り過ぎた。そうして蓬も選んできた。しがらみに縛られない怪獣使いの道でなく、夢芽の隣に居る道を。

蓬にしか出来ないことが、もう一つだけある。

この手が繋ぐ未来は、たった一人か、それ以外か。

その選択に迫られた時、自分は――

深く、物思いに沈んでいたせいかもしれない。

俯き掌を見つめた視界の端に、有り得ない白の軍服が入り込んだ。

それは出来の悪い怪談で語り継がれる幽鬼のように一瞬の出来事で、歩道橋を降りていく褐色の肌の横顔と、金髪の三つ編みを揺らめかせて蓬の世界から遠退いた。

「シズム、君……？」

口を衝いて出たその名前が、今し方目にしておきながら俄には信じられない。

暦が怪獣優生思想の紅一点らしき人を見かけたと言ったのは先刻の事で、胸騒ぎを落ちつけながらも折り重なった偶然をただのコスプレと断じる確信を蓬は持てない。怪獣が現れなくなって三カ月が経っていても非日常に身を置き続けた危機感は薄まらず、考える前に身体を走らせていた。

「ごめん夢芽！　ここで待ってて！　少し、確かめたい事あるから！」

「え、ちよ、よもさん……！」

暦を探していた時よりも気が急いで、夢芽の返事も待たずちせへの説明も惜しんで蓬は飛び出す。学園祭以来やけに顔に馴染んでいたミイラの包帯が、風圧で一層肌に纏わりつく。階段を上がってくるカボチャ頭の紳士が鬼気迫る蓬の表情にぎよつとして道を開けてくれた。「すみません！」と声のみで謝って、勢いで降り切った歩道橋の下、蠢く人波の遥か向こうに――幾度となく学校で見かけた白の軍服の後ろ姿。

「蓬――！」

蓬とさして背丈も変わらない、少年の背中を見つけたその瞬間、親しんだ少女の声が耳をつんざく。

落っこちてしまいそうなくらい前のめりに柵から乗り出した夢芽と目が合って、蓬の決意が揺らいだのは束の間で、緑の瞳に眠る不安

に寄り添うよりも、彼女に危機が及ぶ可能性を、僅かでも見逃したくなかった。

物言わず、蓬は力強く眼差しを送り、背中に刺さる視線を振り切る。痛いくらいに右手を握り締めて、雑踏の中に踏み込んだ。

◇

よく走る人だな——と、ちせは飛び出した蓬に対してそう思う。奇妙にも既視感があるのは、かつて夢芽の為にダイナソルジャーに乗って駆け込んできた、印象的な場面に立ち会ったせいだろうか。鉄柵の前ぽつんと置いて行かれた夢芽の背中がやけに寂し気に見える。そう感じるのは今の二人の関係がちせが知っているからで、肝心なところで重荷を一人抱え込むのは、案外と似た者同士なのかもしれない。第三者の立場で推察出来るのはそこまでで、口内に甘味を転がしながら蓬の行方を案じた。

「……急にどうしたんすかね、よもさん。シズムって、あれですよね、怪獣優生思想の」

「そういう名前だったっけ？ でも、あのムジナさんもただのコスプレだって言ってたしな……」

「ムジ、え？ ——は？ ……センパイ、昔の女追っかけてはぐれてたんすか？」

ガリツと、音を立ててちせは飴を噛み締めた。

墓穴を掘るとは正にこの事だ。暦の目の下のたるみと痣のようなメイクがその瞳ごと宙を泳いだ。見上げる従兄は冷や汗のナイアガラで言い訳を探しているが、大方の予想はついていた。何せ今夜、怪獣擬きならぬ隊長擬きの画像を拾い集めていたのは何を隠そうちせである。滝を登るようにSNS中を隈なく泳いで、何の冗談か怪獣優生思想のコスプレがその手の界限で流行っている珍妙な現象も確認した。

怪獣出る所に彼らありかは所詮噂に尾ひれのつくネット社会で真偽の程は定かでないが、兎にも角にも人目を惹く出で立ちの彼らが怪

獣探しに東京中を奔走した記憶は記録となって、顔も知らない誰かの娯楽としてソフトクリームのスコーンのように残り物として消費されていた。

赤の他人から見れば芸能人のようなもので、人の好奇心や野次馬根性に際限はない。忌まわしきアヤメ中学で代わりばんこに〇〇ギルティ等と人の躰きを嘲笑う風習が根付いていたように、その他大勢にとって実態などどうでもいいのだ。あの四人が怪獣使いだと知っているのはガウマ隊のごく僅かだけで、彼らに着せる罪も罰も最早原型なんて留めていない。もう当の昔——それこそ5000年以上も前に、本当は終わっていた事だから。彼らの目的なんて、最後までちせにはわからなかった。わかりたくないことだけは、なんとなくわかった。

ちせと暦にしても、彼らの認識は異なるだろう。あのちぐはぐな四人に対しての見解なんて、永遠に一致しないかもしれない。危険な集団という事実だけは梃子でも動かないが、ちせは肩を寄せて従兄を睨み続ける。

「いや、結局勘違いだった訳だし……見ない振りした方が怖いでしょう、あの人達……」

「……それ、私情混ざってませんか？」

しどろもどろな暦の態度は元が挙動不審気味とはいえ腹の内を探られたくないと顔に書いてある。事態が「あの人達」と複数形に収まるならまだいい。洗いざらい暦が吐くまでちせが沈黙を頑なにするのは、彼の動機に不純な匂いを嗅ぎ取ったからだ。水心でも魚心でも下心でも何でもいい。ここらで白黒付けないと気が済まない。それはもう猫カフェから帰った飼い主に不信感を抱く飼い猫の如く。暦と蓬をここで待っている間、散々夢芽と愚痴ったのだ。人当たりの良さで女友達との交流が絶えない蓬も、未だ人妻と縁が切れていない暦も、同じ穴の貉でしかないのだと。

「——ごめんなさい。ちせちゃん、暦さん。私、蓬探してきます」

一触即発の内輪揉めに、夢芽の声が割り込んだ。

暦と共に視線を送れば、身体ごとこちらに向き直り、意を決した顔

付きで夢芽が鉄柵を背に立っている。白装束の上に羽織った蓬のブレザーを掻き抱くようにして、口元から血の滴ったメイクとは不釣り合いな生気を、その真顔に漲らせていた。

三角巾が落ちないよう、お化けに扮した夢芽は控えめなお辞儀をして、

「今日、二人に会えて良かったです。また、いつか」

面を上げて浮かべた微笑みは蓬を追いかけようと階段に向かった瞬間には、もう臨戦態勢に切り替わっていた。この場を去った行方を、ちせは追い掛けようとは思わなかった。頼ったり頼られたり、きつとあの頃のような協力も出来たけど、夢芽の決意を無下にしたいくない自分がいた。

「もう待つてるタマじゃないっすよね、南さん」

ひとりでにそう呟いたのはいつの日か水門の上で俯いていた彼女の小さな背中を思い出したからで、一人納得するちせを他所に、置いて行かれた曆も彼なりに不器用な相槌を打つ。

「……俺はよくわかんないけど、ちせがそう思うならそれで」

「主体性ないっすね、センパイ。それじゃ社会で生きていけないっすよ」

皮肉りながらその実、良いことを言っているようで何も言っていない、柳に風と受け流す曆の生き方はちせにとって好ましかったりする。たぶん、世界で一番正しくないこの人の前では、ちせも正しくなくていいからだ。彼を軽んじればそのまま自分に返ってくる言葉もままあって、傷の舐め合いも馴れ合いもキャンデイのようにいつかなくなってしまう。永遠はないのだと、最高の友達を見送って思い知った。それが今生の別れになるのかは、今はまだわからない。この街で働いたり働かなかったりする人生の先輩は少なくとも、折に触れてちせの人生に顔を出してくれるのだから。そんな腐れ縁が隠れた希望になっっている事も露知らず、曆はちせに言い返すでもなく夏休みの宿題から目を逸らす学生のように項垂れていた。

「うん。ここにいる時点でかなりね……。もう遅いから、家まで送ってくよ、ちせ」

ちせが生まれた頃からちせの世界に居たその人は、誰かに振られた役割を請け負うでもなく、当然の事のようにそう言った。とどのつまり彼にとつては、仕事もちせの迎えも果ては怪獣と戦うことさえも、同じハードルの高さにあるのかもしれない。その点においては山中暦という人間に変わりはなく、ちせは一層調子づく。

「出してくれるんすか？ 現役ダイナストライカー？」

「ええ……嫌だよタクシーなんて。電車でよくない？」

「……やっぱセンパイには何も期待しないっす」

電車賃も期待出来ねえな——やっぱゴールドバーンしか勝たん。ちせは一つ賢くなり、暦は懐を死守した代償に信頼を失う。どちらともなく隣り合って歩き出し、久方ぶりの従兄妹会議は仲睦まじさからほど遠く、未だ見慣れないオールバックや大人の制服を見上げてちせは不意に口元を綻ばせた。

「今日もその恰好、似合わないっすね、センパイ」

「なんで嬉しそうに言うの……？」

社会から浮いたジャージも、仮装に紛れないスーツも、暦が何者であるかを証明してはくれない。止まり木のように背の伸びた暦の隣で、ちせは今日も俯いて笑っている。くたびれて戸惑った彼の庇護下、補導から逃げる従兄と二人、飴はまだなくならない。

たった一人であの怪獣優生思想を相手取る可能性を前にして、怖くないかといえば嘘になる。戦う術だったダイナゼノンはグリッドナイト同盟と共にフジヨキ台を去った。考え得る最悪の事態を想定して蓬は走る。蟻塚の如く集まった群衆を掻き分け、辿り着いたスクラブル交差点の真ん中で、まるで台風の目のように人々に避けられながら、遙か空を見上げる三つ編みの少年の背中を見つけた時、蓬は深く息を吸い込んだ。

「シズム君!!」

人目も憚らず蓬は叫んだ。辺りの人間に奇異に見られながらも、蓬は一心に見据え続ける。ただの人違いであればどれだけ良かっただろうと、ほんの一時とはいえ同じクラスで見かけた少年の風貌と瓜二つの姿を認めて、蓬は歯を噛み締める。

背中を向けたまま、シズムらしき少年は動かない。生きとし生ける人を意に介さないその雰囲気、ミステリアスだった彼の面影を更に彷彿とさせる。最後の怪獣の中で対話した時のように隔絶とした距離のまま、蓬は足りない分の覚悟を、夢芽の顔を思い出しながら奮い立たせた。

ピンと指先を伸ばした右手を、蓬は対象に向ける。

もう、この手を使う時が来なければいいと願っていた。

手の甲に刻まれた“S”の字によく似た傷跡と向き合いながら、蓬は人差し指と中指、薬指と小指をそれぞれ寄り添わせたまま開いていく。

指の境目からかつてのクラスメイトとよく似た少年の後ろ姿を瞳に捉え、眦を決し声を発する。

「インスタンス——!!」

それはただ一時、怪獣を振り向かせる“だけ”の、蓬の手に備わっ

た不全の力。相手の心臓よりも奥深く、種のような核を掴んで縛り付ける、自由とは程遠い意志の綱引き。

その感触を知る前に――蓬が言い切らぬ内に、少年が振り返った。息を呑んで彼を見つめる。時が凍ったような瞬間に雑踏も雑音も掻き消えた。一本の線に結ばれたようにお互いを認識しているのに、少年の目線は髪に隠れてよく見えない。あの時のシズムと同じように、少年は何かを言いかけて、

時間が動き出したかのように人々が視界を横切り、過ぎ去った視界の先で、確かにいた筈の彼は音もなく消えていた。初めからそこになかったかのように、蓬だけが取り残された。

安堵はない。ただ、何かを掴みかけた右手を伸ばし切って、蓬は立ち尽くす。仮に今までの事がただの幻なら、自分が向かうべきは病院になるだろう。

全ては杞憂。怪獣はもう、この世界に残っていない。

それでも、想う。

見えないものを見ようとして、いなくなった人を探し続けるのは、もうたくさんで。

交差点を行き交う人々は、誰も蓬に目もくれない。これから行う思い付きだって、きつと気にも留めないだろう。今度は一呼吸の間もおかず、蓬は寝起きのルーティンのように何気なく、指を開いたまま右手をくるりと返した。

シズムが、自らの内側の怪獣を解き放ったように、指の境目から世界を覗き見た。

「――ドミネーション」

混線した回線がクリアになり、ノイズというノイズが蓬の五感から締め出され、見る間に視界が都会の風景から書き換わる。

回路の中に閉じ込められたかのように三色の線が縦横無尽に駆け巡った、広いようで狭い世界。赤青緑と信号のように明るい色を際立たせた、夜よりも暗い空間。

蓬の中に在る怪獣の世界で、対峙する者はいない。

『やっぱり君は、本物の怪獣使いの才能があるみたいだね』

辺りに響いた、聞き覚えのある少年の乾いた声を聴いて、蓬は驚愕と同時に目を伏せる。背中に感じる「彼」の方へ、振り返ることはしなかった。

「……そこに居たんだ、シズム君」

絡まった縁は、まだ断ち切れていない。そこに敵も味方もないのだと——言葉に出来ない懐かしさだけが、掌中に収まっている。蓬が感慨に浸る間もなく、シズムの声は尚も続く。

『君は一度、怪獣になった俺と繋がった。ここに居る俺は、その繋がりにから流れ込んだ余剰に過ぎない。怪獣の力は理の外にある。君達の境界の綻びが、君の中に居る俺を呼んだんだ』

淡々と語る物言いは、その言葉の是非よりも真実味を帯びて耳に入り込んでくる。どこか人をかどかわすような、それでいて導くような、人の理解を離れた怪獣の思想。彼を始めとした怪獣使いは、本来なら遙か昔の人間で、怪獣によってその身体が減びないよう繋ぎ止められていた。広がる痣に苦しめられていたガウマを、蓬も目撃している。怪獣の力の有無はそれだけ怪獣使いにとって影響を及ぼし、それは未成熟な蓬の才でも例外ではないのだと、今起きている現実を受け入れた。この残り火が篝火にならないよう、火の始末をつけるのが蓬の使命。頭でそうとわかっているのに、身構える気にはなれなかった。

「……友達が言った。今日は、死者のお祭りだった」

『自由に受け取ればいいよ。それが君達の理屈なら。もうとつくに、この世界から怪獣は失われたんだから』

自分の思想にすら執着がないのか、シズムはどこまでも淡々としている。彼とは、戦うことでしか話し合えなかった。わかり合えないことだけわかって、互いの正しさを押し付けるならいつまでも平行線で、残滓に過ぎない彼と、あといくつ言葉を交わせるだろう。そう思

うと、予てからの悔いは堰を切って溢れ出した。

「でも、シズム君が俺の中に残ってるってことは、シズム君の心残りだって、どこかにあるんじゃないかな……。俺は、知りたいよ。シズム君の事も」

怪獣の代弁者のように振る舞う、シズムという少年の人物像は、今に至るまでも掴み切れない。怪獣優生思想なんて大仰な名前を名乗っても、蓬にとってはクラスメイト。好きな教科や嫌いな教科、昨日見たテレビの話もしたりして、そんな未来があつたかもしれない、蓬の平凡な日常の内側にいた人。

自分の未練を他人に押し着せる烏滸がましさを、余計な真似だと自分で思う。怪獣に頼るでもなく誰かを繋ぎ止めるのなら、時に強引な手段も必要になるのだと、お節介なあの人の顔が思い浮かぶ。力を貸して欲しいとは言わない。言葉が届くかは、シズム次第だから。

無数の回路に縛られた世界で、無言の間が空いた。

背中を向けたままそうしていると、彼がいなくなったのかと錯覚する。指の境目に眼を押し付けたまま、瞬きの合間にはこの夢から醒めるような不安が込み上げた。

『……帽子』

「えっ？」

ぼつりと、神秘的な雰囲気にとぐわなない単語が出たせいで、蓬は思わず聞き返す。さっきまで世界の危機が肩に乗せられていた気がするのに、落差に戸惑う蓬を脇に話は進む。

『俺の帽子、落としたままだから。落し物は拾った人が届ける、それが君達のルールでしょ？ だからたぶん、見つけた人が困ってる』

まるで深刻さが無いのに、彼が怪獣の何たるかを語るように言うものだから、一人だけ肩肘張っていた蓬の立つ瀬がなくなる。プールサイドを走らないよう指摘されたあの日のことも、校内に落ちていたトマトージュースの紙パックを拾い捨てたシズムの事も、蓬は全部憶えている。怪獣で世の中をひっくり返そうと革命を目論んでいても、彼の人となりには矛盾はなくて、それがやけにおかしかった。

「……ははっ、あははっ」

『……何がおかしいの?』

蓬の笑い声に怪訝とするシズムの反応すら、余計にそのおかしさを加速させた。初めて会った時からそうだった。彼が蓬に示すのは純粹な興味のみ。その在り方がまるで初めて遊ぶゲームのルールを訊く子供のように、憎み切れずにいる。

最初に歩み寄ってくれたのは、シズムの方だから。お腹を抱えそうなくらいくつくつと笑って、悪気はなかったとだけ、伝えたくて。

「ごめん。わかんない、わかんないけど……それがシズム君なんだなって」

『……』

「ねえ、シズム君」

後ろに立つ彼は答えない。

でも今は、気配だけならわかる。

怪獣の力は常識を覆す。その可能性を最も重視しているシズムの前でなら、どんなに有り得ないことでも口にしていい気がした。どこかで生き返っているかもしれないお姫様と会いたいと、自分の目的をガウマが吐露した時、その奇跡に夢芽が惹かれたように、今思えばあれも怪獣の思想の入り口であったかもしれない。何かに縋りたくなる事なんてたくさんある。例えばそれは神様で、例えばそれは怪獣で、シズムはその形や色を具体的に知っていた。彼の考えに染まっで、同じ土俵に立つことはもう出来ない。それでも蓬は、ただのクラスメイトに言わずにはいられなかった。

「——もしも、誰も傷つけずにまた会えたら、その時はさ、一緒に串カツ、食べに行かない?」

それがどれだけ虫の良い話でも、綺麗ごとでも。

最先端の怪獣使いとしてでなく、『麻中蓬』として、シズムと対話を求める。

『……どうして? 食事なんて、俺には必要ないけど』

本物の怪獣使いは案の定、人の道理に疎かった。シズムの言う通り彼が食事をしている風景を、蓬は見た覚えがない。恐らくはそれだけに留まらず、彼は人としての機能に囚われていないのだろう。眠ると

いう概念すら、忘れているのかもしれない。生物としての活動のあらゆる欠点を削ぎ落として、一人で完結している。他人を必要としない生き方は、それが叶うならどれだけ素晴らしい事だろう。両親の離婚に振り回される事も、変わった名字で他人を気遣わせる事も、母親の再婚相手を煩わしく思う事もきつとない。この世のありとあらゆることがしがらみなら、蓬も心から同調する。でも、それだけじゃなかったから。

「俺、好きなんだ、串カツ。無駄になるかもしれないけど、もしもシズム君の口にも合ったら、俺は嬉しい」

お腹が減らないと、一緒にご飯も食べられない。

あの河川敷でお腹を空かせたガウマと会った時、全てが始まった。あの人が何もかも完璧だったなら、蓬はきつとここにはいない。夢芽や暦やちせだって、一生集まる事のない赤の他人だった。支える事も支えられる事も全部必要で、あの高架下の寄り道が、今の蓬を形作っている。

何もかもが偶然で、始めは億劫だったガウマとの付き合いが、傷と血肉になっていく。自分を巻き込んでくれたあの人のように、シズムとも向き合えたら良い。背中合わせにそう祈って、蓬は目を伏せた。

『……やっぱりわからないな、君は。こういう時は、どんな反応すればいいの?』

まるで同級生との会話にもルールがあるかのようにシズムはそう尋ねた。返答の前に置かれた一泊の間は彼の関心を少しでも惹いたのだと、自惚れてもいいのだろうか。お互いの顔も見えないまま、蓬は絵空事を重ね続ける。

「笑ったら、いいと思う」

冗談が得意な大切な女の子の悪癖が、お節介をアシストする。

言い切ると同時に瞼を下ろして、シズムの結論を待ち侘びた。いつまで経っても返事は来なくて、目を見開いたその時には、世界は光と音を取り戻していた。

鳴り響く歩行者信号の音色。

静止した世界が動き出したかのように、街中の雑踏が息を吹き返

す。

ネオンの明かりが照らす看板にひしめいた街を背景にして、遠く陽炎のように、シズムは蓬の先に立っている。

振り返って、蓬を見つめている。

彼の瞳は前髪に隠れて、表情は上手く掴めない。その口許が微かに綻んでいるように見えたのは蓬の願望かもしれない。白昼夢染みた現実を補強するように、彼の周りを忘れようもない人達が囲っていた。

白を基調として各々が左袖に異なる色のラインを施した、人目を惹く煌びやかな軍服。その派手さに見合った美貌を放つ女性がいた。着崩したその衣装に負けじと真っ赤な頭髪を片側だけ垂らした強面の男も、人の良さそうな雰囲気のマッシュヘアの青年も、蓬はみんな憶えている。

誰の目にも留まらず、ここにはいない人のように並ぶ彼らに、呼びかける術を蓬は持たなかった。

今宵はハロウィン——死者のお祭りはもう幕を引く頃合いで、蓬は怪獣を支配する手を下ろす。心の片隅に置いていた小さな疑念。怪獣優生思想と雌雄を決したという事は、彼らを終わらせたという事に他ならない。怪獣となったシズムが撒き散らしていたのは何者をも拒絶する反発の力で、5000年前から一度蘇った彼らが降りかかった死そのものを、もう一度否定しないという保証もどこにもない。彼らの未練に手向けを贈る資格は蓬にはない。それでも彼らが、この世に留まらない事を選ぶというのなら、それは安らかな眠りに、繋がってくれるだろうか。

スクランブル交差点を埋め尽くす勢いで人々がなだれ込む。怪獣優生思想の影法師は濁流に吞まれて見えなくなった。残された蓬の肩に誰かがぶつかる。どれくらいここに立っていたのだろうか、永遠のようで一瞬のようで、この夜どれだけ歩いても感じなかった疲労が全身に押し掛かる。経験から推測するなら、インスタンス・ドミネーションの反動。人波に乗ろうとしてもフラついて、すれ違う人達が投げた視線が痛かった。

「蓬ー」

苦し紛れに行進に混ざろうと歩き出した時、その声は鮮明に蓬の耳に届いた。一体どれだけ探してくれたのだろう。走るのだって得意じゃない筈なのに、振り返れば人混みを掻い潜る夢芽の白装束姿があった。

蓬のパーカーの裾を必死に掴んで、夢芽は息を切らして膝に右手をつく。横断歩道の中央で立ち止まる蓬達を邪魔臭そうに避けていく人達も、今は気にならなかった。

「……夢芽。戻るまで、待つてって」

「ハア……蓬が……急に走り出すから……心配、したんだよ……」

ぎゅつと裾を掴む力は思ったよりも強くて、喪う痛みを知っている彼女を不安にさせた申し訳なきが今更募った。夢芽が顔を上げるまで待つて、蓬は伝えるべき事を真っ先に言う。

「……ごめん。これでたぶん、全部済んだから」

「……済んだって、何が？」

怒り心頭とは言わないまでも、夢芽の低い声音には一人だけ納得している蓬を責め立てるトーンが滲んでいた。到底すぐには話せる自信はなくて、世渡りの処世術として染み付いた愛想笑いを浮かべる。

「取り敢えず、説明は後で」

「一番大事な事なんだけど……」

夢芽の真顔がどんどん険しくなっていく。蓬の小手先なんて通じない。躊躇なく壁を破ってくる。そんな彼女だから、時に煩わしかったり、時に有難かったり、そんな気持ちを繰り返す。探してくれたありがとも、心配させてごめんも、口にしないと伝わらない。蓬に呆れて裾から離れた夢芽の左手に、蓬は言葉よりも先に右手を伸ばす。未知を掴んだ感覚が、繋いだ手の感触に上書きされる。夢芽の目はまだ非難を訴えてるけど、心なしかその口許も柔らかく緩んで見えた。これだけ近くに居てもわからない女の子と、蓬は歩幅を合わせる。

今日何度もあったように、誰かのジャケットと肩が触れかけた。

視界の隅を過ぎ去った、ピンク色の髪。

さらしのように巻いた、黄色の包帯。

蓬よりも頭一つ分高い背丈から降り注ぐ、囃し立てるような文句。

「——もう離すんじゃないぞ

——蓬」

懐かしい声でした。

忘れようもない声だった。

忘れたくない声だった。

振り返った先に声の主は探せなくて、この夜を彷徨った。怪獣使いに想いを馳せる。

いつの日か花火の夜に蓬達を見守ってくれたあの人は、きっと死者のお祭りでも顔を出さないんだろう。事の真偽よりも何よりも、彼の存在を感じ取れた事が、泣きたくなるくらい嬉しかった。眦にこみ上げた涙を飲み込む。それは本当の彼に会った時まで、取っておこうと思つた。

蓬は前に向き直る。

誰かに押された分肩が近付いた夢芽の方に、より深く手を握り込む。

相手を確かめるように、目を合わせて、

「——離さないでね」

二度とはぐれないように、蓬はそう口にした。

「——離れないでね」

それが当然の事のように、夢芽が微笑み返した。

都市に満ちた活気と談笑が、雑踏に紛れる蓬や夢芽を、その他の誰かに変えていく。すれ違う人の数だけある物語を見過ごして、死者の祭りに繋ぎ合う生者の手。夜の帳の下りた街を彼女の隣で、青信号の光を潜る。

夜の河川敷は静かな水面を湛えながら、燦燦と陽光に照り付ける朝の通学路とは違う顔をして、祭り帰りの夢芽や蓬を迎え入れてくれていた。対岸の街並みでは初めてダイナゼノンに乗って戦ったあの街で、もたれかかるように倒れかかっていたビルの撤去作業が進んでいた。壊すよりも、直す方が難しい。仮にあのビルを建て直したとして、同じ風景は戻るだろうか。夢芽は毎日のように登下校しながら、そんな景色を蓬と一緒に見る。基礎から始めてあの場所に同じビルが自立するその日が来る前に、自分達は卒業して、ここを歩く事もなくなるだろう。そう思うと偶に、同じ一步が大切になる。やけに繊細な気分になってしまうのは、今日がそれだけ慌ただしかったからで、疲労を顔に隠せなくなっている蓬に時折肩を貸しながら、二人でお馴染の高架下に休息についた。

「……ねつむ」

いつかのガウマのようにコンクリートタイルの斜面に寝転がり、蓬は右腕を脛の上に横たわらせた。あの交差点で彼を捕まえた時からそうだった。ただの疲れとしては違和感の伴う容態の変化。そんな彼の側に居ると、夢芽はどうしても胸騒ぎを覚える。この高架下に住んでいたガウマがずっと前から、広がり続ける痣にその身を蝕まれていたことと、つい重ねてしまうから。

「……なんで言ってくれなかったの、シズム君のこと」

ここに来るまでに蓬が説明してくれた。最後の戦いで、彼が怪獣となったシズムを怪獣使いの力で止めた事。繋がった怪獣の中で、シズムと対話した事。今日という日に自分の内側に残ったシズムと決着をつけた事も、到底すぐには処理出来なくて、つい詰問口調になってしまう。もう眠ってしまったのかと思うくらい、蓬の口は重かった。

蓬自身は怪獣を掴んだ反動だと、己に起こった事を推測していたけれど、夢芽からすればその現象はガウマの状態に近くて、シズムが話していた「怪獣使いは怪獣との繋がりが絶たれれば朽ちてしまう」

という危ない橋を渡っているように思えた。蓬とガウマの差異は、前者が現代を生きる人間で、後者が5000年前の人であるという一点。蓬の条件なら大事には至らない筈だと、夢芽は沈黙の間自分に言い聞かせる。酷く長々しい間が置かれて、鉄橋の上を電車が通り過ぎ、響き渡る振動の余韻が耳の外に微かに掻き消えた時、夢芽はか細い声を耳に拾った。

「……ふめん。夢芽のこと、巻き込みたくなくて」

ぼつりと、それだけ口にした蓬の使命感が、夢芽には自分だけ蚊帳の外に追い出されてるように感じられる。

いつかのちせの気持ちだが、漸くわかった気がする。

それがどれだけ大切に思われている証でも、関係ないなんて、突き付けられるのは腹立たしい。

この河川敷で伝えてくれた告白すら、蓬は忘れてしまったのだろう。怪物が居なくなっても、ダイナゼノンに乗らなくなっても、同じ道を選んでくれたのは蓬なのに。夢芽はもう、当の昔に巻き込まれている。体育座りで川面を眺めながら、夢芽は溜め込んだもの吐き出した。

「別に謝って欲しい訳じゃなくて……勝手に、一人で背負わないでよ」

「……………あんがと」

次はそうするとか、言ってくれないんだ——面倒な自分が喉から出かかって、ヒーローを目指す男の子の意地の方が、よっぽど面倒なように思う。

「そんなとこまで、ガウマさんに似なくていいんだよ、蓬は」

座り込んだコンクリートタイルを上ればすぐ側にある、ボロボロのビニールシートがテント張りになったガウマの棲家へ、夢芽はそつと振り返る。蟹煎餅を詰めた筈の紙袋も、生活感を漂わせたガウマの持ち物も手つかずで風に晒されて、管理者のいない場所を見る度に荒れ果てている。ぴっちりとしたビニールシートがカーテンのように閉められていたそこは、今やもう開ききっていて、深い夜の入り口を覗かせていた。薄い闇の中白く浮かぶ、ガウマの腰掛けている定位置に置か

れた仏花は、夢芽と蓬が相談してお供えしたものだ。『縁起でもねえ』と、もしもここにガウマがいたら怒るだろう。ガウマ隊の誰一人、いなくなつた彼に対して上手くふんぎりをつけた訳じゃない。

でもこの場所は夢芽や蓬にとつて毎日の通過点で、もしかしたら“の寄り道で時間を奪うことは、きつといなくなつた本人が一番望まないだろうと、学園祭のあの日から蓬の意識は変わったようだった。喪に服すなんてお利口な理由じゃない。ほんの少し、距離を置きたかつただけだ。姉が亡くなつた現実をどこかで認めたくなくて、夢芽は南香乃のお墓から逃げていた。蓬は夢芽との現実を選んで、もしもの奇跡を当面の夢のままにした。一緒に選んだ白百合もマーガレットもガウマ宛てだ。人知れずその花がなくなる日を、夢芽も蓬も祈っている。

「……蓬？」

折角ガウマの名前を出したのに、蓬の反応がないのは珍しかった。隣を見遣れば目を塞いでいた蓬の右腕は完全に垂れ下がっていて、その脛は完全に閉じ切っていた。内情を知らなければ、くたびれた包帯を頭髮から額に至るまで巻き付けて、水色のパーカーを着た彼は祭りに浮かれ羽目を外し過ぎた学生そのものだ。健やかな寝息に安堵して、夢芽は一人取り残される。ふと視線を前に向けると、斜面の下の川辺の草むらを揺らして、野良猫が夢芽達を観察していた。毛並みは白だが、高架下の暗がりのせいで黒猫にも見える。何をしてもなくこの場所に居るといふ事は、この寝床を根城にしていたりするのかもしれない。

「ガウマさんの友達かな」

ふとした他愛のない話に、高架下の空虚だけが返ってくる。

疲れ切つた蓬を寝かせてあげたい気持ち半分、構つて貰えない寂しさが青天井。

徐々に鉄橋を震わせて、再び通り過ぎた電車の走行音に、猫は驚いて瞬く間に走り去っていった。

騒音に引かれて蓬の様子を窺うと、彼は一瞬だけ寝ぼけ眼を開いていた。景色を取り込んだ半目は見る間にするする垂れ下がり、半覚醒

の意識の最中、彼は寝ぼけたようにうわ言を繰り返す。

「……おれ……ちゃんと……まもり……したよ……ウマ、さん……」

夢芽があの人の名前を、何度も呼んだせいだろうか。夢現の中を彷徨っている蓬の目尻に溜まった雫は溜まったまま零れていない。側に寄って彼の寝顔に目を落とす。瞼を閉じたままだとその童顔のせいか、いつも手を引いてくれる彼が歳下っぽく思える。垣間見えたその幼さのせいかな、蓬に先輩風を吹かせていたガウマにとっては、可愛い弟分だったりしたんだろうかと、普段はしない思考が相次ぐ。今日一日必死に蓬と歩き回ったからわかる。蓬の中に居るガウマの存在は大きくて、夢芽にとっても大切な恩人で、姉を亡くした自分に蓬がずっと付いてきてくれたように、夢芽も痛みにも寄り添える自分で在りたかった。躓いたら、もつと強くなれるから。そんな前向きさを、暑苦しい顔を近付けて褒めてくれたのがあの人だから、自分の気持ちを認めて、夢芽はそつと蓬の涙を掬う。その雫に、停まっていた夢芽の心は救われたのだと、他人の為に泣いてくれる彼の隣で気持ちが溢れる。

彼の顔を真上から見下ろして、夢芽は耳元の髪を掻き上げた。

夢芽の影が蓬を覆う。これからする事を想像して、胸の鼓動が早鐘を打つ。付き合って、名前を呼んで貰えるようになるまで、三ヶ月。順番を間違えたのか手を繋ぐ方が先になって、関係の進展は夢芽からすると物足りない。今日一日、慣れないクラスメイトとの交流の一步を踏んだ。蓬もまた、怪獣の置き土産にケリをつけた。夢芽が好きな夢の国の物語なら、多少の褒美くらいはあつていい筈だった。都合の良い魔法はない。だから自分で起こすしかなくて、夢芽は唇を薄く開く。

「——蓬が、悪いから」

短く息を吸い込んで、斜面に寝転がる蓬の口許に、夢芽はそつと唇を落とす。



優しい、夢を視ていた気がする。

黄昏色の空から隠れるように、高架下で集まって、怪獣が出ない日を過ごした記憶。

もう、何を話していたのかも覚えていない。

サボりがちだった訓練に率先して参加している頑張りを認められたり、バイトじゃ俺が先輩ですからなんて軽い口答えをしたり、そんな何気ない、冗句の延長であったように思う。じゃれ合うようにガウマが蓬の首から腕を回して、羽交い絞めにされながら藻掻いた記憶。全然力が入ってないのがまた笑えて、一人っ子だった蓬には、兄が居たら、こんな風だったのかなと思えた。あの河川敷のそこかしこに、思い出が詰まっている。

蓬は目を開けて緩慢に起き上がると、重い瞼を擦り付ける。

側に体育座りしていた夢芽を見遣ると、蓬は経過した時の流れを漸く意識した。

「……………めん。俺、どれくらい寝てた？」

獲物を定める爬虫類の如く緑の瞳がスライドする。

「……………ばーか」

その捨て台詞を吐き捨てる為に地蔵になっていたとでも言わんばかりに、夢芽は悪態を吐いてのっそりと立ち上がった。高架下を先に出ていく背中を追おうと考えるより前に呆気を取られ、蓬はつ独りごちる。

「何よあれ……………」

怪獣より、女心の方が掴めない。

目が醒める想いで暫くフリーズして、口許の違和感が付いた。

「……………甘」

まるでアイスを口にした後のように冷ややかな唇からは、何故だか、チュロスの味がした。

遠く水門を一望出来る、歩き慣れた橋の上。疎らに車道を通り過ぎる車の影をくつきりと浮かび上がらせる、街灯の続く一本道。等間隔に並んだそれらの下に幾度も立ち止まり、蓬は後ろに振り返る。

「……夢芽、なんか遠くない?」

「……ない」

そう言っただけ俯き気味に歩くお化けは、もう一本後ろの街灯まで離れていた。時折手持無沙汰に鉄柵の上に指を滑らせながら、マイペースな歩調を維持した夢芽の表情はどこかむすつとしていた。目を離した隙に立ち止まったり蓬の視界から消えることは日常茶飯事だが、今夜は一段と不機嫌なご様子だった。

「俺、なんか変な寝言とか言っていました……?」

夢芽に歩み寄りながら蓬は尋ねる。顔を見合わせると、彼女は勿体振るように目を逸らして答えてくれた。

「あ〜……うん、言ってた。私の名前呼んで、好きですって、三回くらい」

「?..でしょ……?!」

意図せず藪を突き蓬は紅潮する頬を腕で覆い隠す。夢芽はその反応に満足したように微かに頬を緩め、蟹の鋏型の両手を肩の高さで持ち上げる。

「うっそ——じゃ、なかったら、良かったんだけどな」

一頻りからかい終えて手を下ろす夢芽の前で、蓬はより深く口許を覆う。駄々漏れになってしまえば口にしてしまいそうな自覚も蓬にはあつて、夢芽もてんでそれを疑っていない。短いやり取りで露呈した恥ずかしさも、いつか慣れてしまうのだとしても未だ慣れない。手綱を握った恋人は鉄柵の上に両腕をもたれかけ、夜に佇む川の水面を眼下にぼつりと眩いた。

「呼んできたのは、ガウマさんの名前」

「……そっか」

筒抜けになった心の内を認めて、蓬は夢芽の隣に並んだ。彼女と一緒にあの水門を眺めている巡り合わせが回り回って不可思議で、その縁を想えば、どちらともなくあの名前が出てくる。

「ここで会ったんだよね、私達、ガウマさんと」

「うん。夢芽がガウマさんに叱られてた時ね」

「はい。どうかしてました。反省します。しました。これでいい？」

「俺に振らないですよ。とつくに水流してるでしょ、ガウマさんも」

「だったらいいけど。ガウマさんいなかったら……ううん、蓬とも会わなかったら、私、今日もここに居て、今でも約束破ってたと思う」
過去を振り返る低い声音に仄暗さを滲ませて、夢芽は柵に乗せた腕の中に埋もれる。海ほたるで彼女の奥深くに近付いた時のように、辺りは静けさを保ってはくれなくて、走り去る車のヘッドライトが彼女の横顔を照らすのを蓬は横目で見つめた。あの頃のように暗い海底に心を落つこととしてしまうような気がして、不安に駆られる蓬の隣で、夢芽は柵から身を離す。右手だけを冷たい鉄の上に預けながら、蓬に眼差しを送ると、

「だから、ありがとね、蓬。私の事、連れ出してくれて」

初めて彼女の機微に触れた雨の下よりも、南夢芽は上手に笑いかけられていた。澄んだ緑の瞳はそのまま、彼女の心が健やかに芽吹いたものだ、隣に居た蓬は自惚れていいものか数瞬迷う。でもきつと、誰の手柄でもないのだろうと、思い直すのは早くて。

「夢芽が、自分で歩いたんだよ」

亡くなった姉の真相を追いながら、二度と誰かが手遅れにならないように、ダイナゼノンの操縦に打ち込んだ彼女を蓬は知っている。壊れた街まで共に出向いた時、その心根の強さに自分も影響された。蓬の世界は狭いから、被害の把握を身の回りだけに留めていた。ダイナゼノンに乗っている以上、世界と無関係ではいられないと、怪獣に纏わる出来事に対岸の火事にしなかったのは彼女の意思で、その動機にはたぶん、大切な人を喪う悲しみと深く結び付いていた。危うさと紙一重の、疑念と真実に裏切られるような旅路の隣で、蓬が手伝えた事

は少ない。最初の一步を傷付きながら繰り返したのは、他の誰でもない夢芽自身の選択だから、彼女が少しずつ笑顔を取り戻している事実だけで、充分過ぎた。

「ほら、行こ。立ち止まっていたら、それこそガウマさんに怒られるつて」

「暗い顔すんじゃないやねえ蓬い」

ノリ良く応じる夢芽の声真似が今の蓬には大変小気味良いけれど、現在進行形で学生は絶賛補導対象である。千変万化する恋人の奇行を愛しく思いながらも、蓬は歩き出す前に夢芽の方に右手を差し出した。

「言いそう。つか声合わな過ぎでしょ」

「うつるさ。でも、暗い顔見せなかつたのつて、どっちかっつていうとガウマさんだよね」

「ね。俺らにえんだけ割り込んでき。つて結局ガウマさんの話なる訳ね。言いたい事、一杯あるけどさ」

車道側を歩きながら夢芽の手を引いて、話すのはあの人の事ばかり。夢芽は蓬の顔を覗き込むと、より深く指を絡めて肩を近付けた。引き寄せ合うように、蓬も握り返した。

「亡くなったお姫様の事とか……もうちょつと話してくれても良かったけど、簡単じゃないよね、やっぱ。私が香乃の事、前向きに考えてみたって言った時、ガウマさんめっちゃ食い付いてたし。今思えばあれも、ガウマさんなりに前向きになろうとしてたつてことかな……」

夢芽との付き合いが長くなって段々と理解してきた事だが、彼女は記憶力に優れている。ダイナゼノン絡みで授業を抜け出る時も、一日のスケジュールを把握していたのは夢芽の方だったから、ガウマ隊が過ぎた日常の細やかな所まで、彼女は忘れずにいるのだろう。ガウマが夢芽に詰め寄るように顔を近付けたある日の事を、蓬も釣られて思い出す。最悪の出会い方をした少女の変化を誰よりも喜んでいたのはガウマで、あの頃はまだ、大切な人を探しているという事実以外おくびにも自分の過去を明かしてはくれなかった。

「あんな悲しい話聞いたら、ね……」

怪獣が出なくなつてから聞かされた、5000年前の顛末。

仲間に裏切られ、自分を始末しようと目論む国をそれでも守り、戦い尽きたその末に、将来を誓つたお姫様にまで後を追わせてしまった事。

悠久の時を越えて蓬達と会うよりも前に一度蘇り、その真実を他者から教えられた事を、夢のように憶えていると、蓬達とは何もかもスケールの違う生涯を語ってくれるようになるまでには、ガウマの憔悴は色濃くなつていた。それすらも隠し通そうとしていた彼の仁義が、戦いに巻き込んでしまった蓬達へのけじめだと頭ではわかっている。彼の水臭さをよく知る夢芽も、一言で収まりそうになかった。

「ガウマさんがどんな風に痛いこととか、苦しいとこ隠して、私達応援してたのかまではわかんないけど……大切な人がいなくなつて、後を追いたくなるお姫様の気持ちは、ちよつと、わかる気がする」

行き詰まつた感情に心を重ね、俯く夢芽の横顔が栗色の髪に隠れた。彼女が想像する“死”の実像は、恐らく蓬の感じるそれよりも確かな輪郭を持つて目に浮かんでいる。途端に歩調が合わなくなつて、立ち止まる夢芽の手が蓬から離れた。

いつかの海ほたるで、彼女の機微に触れたせいだろうか。姉を亡くした痛みを呼び起こして我が事のようにガウマの大切な人を悼む心の揺らぎを、深く沈み込んだその面持ちから蓬は敏感に感じ取る。それを勝手な思い違いだと振り払えない程度には、蓬は南夢芽という少女を知っていて、怪獣よりも掴めない人の内側には踏み込めないと、相反する理性が踏み止まる。蓬が思う以上に、自分という人間は当の昔に彼女の一部分のだと、こんな形で引き出したくはなかった本音と向き合つて、まるで順番を追うように自分の後に続く夢芽を想う。

ただの杞憂だと笑い飛ばして、その場凌ぎの馴れ合いで済ませたくない。手を繋ぎ直すだけでも、気安めにもならない気がした。

もう二度と、彼女を悲しませたくない、その一心に突き動かされて、蓬は夢芽の方に振り返つた。

「——夢芽」

俯く彼女と真正面から向き合つて、一步、二歩。

鼻先がぶつかりそうになるくらいに、蓬は顔を寄せる。面を上げて後退る彼女の退路を断つように、白装束の裾を掴んだ。

「よもつ、ぎ、顔近——」

平たい彼女の瞳が見開かれて、抵抗を試みたその言葉ごと奪い去ろうと、薄く開いた唇に、蓬は口許を近付けた。

耳の内に痛いくらいの静寂と、胸の内に立ち込める早鐘の音。

走り去った車の鳴き声は、前か後ろかも定めがつかない。

心の準備なんて足りてない、互いの唇を掠めるような、触れ合うだけのキスをして、蓬は熱を持った顔を瞠目した夢芽から引き離す。

「——冗談でもそんなこと言ったら、次は、怒るから」

出会った頃よりも揃わない目線のまま、蓬は息を吐くようにそう言った。仄かな朱に頬を染めた夢芽の顔が、見る間に茹で上がっていく。その気恥ずかしさは自分も同じで、彼女の表情から不安の色が消え去った安堵と、収集のつかない現状への認識が遅れてやってくる。名前を呼び捨てにするまでにあんなに時間が掛かったのに、自分は何をしでかしてしまったのか？ 捕まえた夢芽の裾から手を放し、蓬は動機の放出に駆り立てられる。

「……そつのごめん。こんなのが……初めてで……。でも、嘘でも夢芽が……いなくなる、こととか、想像したくないし、俺が死んだ先の事とか、考えて欲しくなかったから」

「……………ない」

「へ？ ……ないって、何が？」

纏まるように纏まらない言い訳は、蚊の鳴くような声に遮られた。

夢芽は逃げるようにまた鉄柵の方に身を乗り出す。朝のホームルームで机に突っ伏すみたいに、また両腕の中に顔を思いつきり埋めて、辛うじて届く抗議はやはり心許なく。

「だから……メテジャ、ない」

「いや声ちつき。てか、夢芽も照れてんすか？ 意外と、かわいいところあるじゃ、」

普段主導権を握りがちな彼女の方が、自分よりも冷静を欠いてい

る。その様子に思わず蓬は調子づき、恋人の照れ顔を拝もうと我ながら気持ちの悪い純粹な動機で夢芽の隣に並んだ。彼女のように足間で柵と柵の間に挟み込むような真似はせず、自分なりの余裕を演じて無言のまま続きを促す。果たして夢芽は紅潮した顔を僅かに持ち上げ、川の水面を見下ろしながら言葉を汲み上げた。

「キス、初めてじゃない」

「は？」

脳がフルバーストした。

再び顔を覆い隠した少女の隣で蓬の脳裏を走馬灯が駆け巡る。思い起こせば約束をすっぱかす為散々男を引っかけていた女子高生。普段のコミュ力から疑念を持つ余地もなかったが突如浮上したその可能性を蓬は否定し切れずにいる。これは自慢だが夢芽は可愛い。滅茶苦茶可愛い。今まで悪い虫の毒牙にかからなかったと誰が言い切れよう。不安は不安を呼びシズムというわかりやすいイメージを膨らませて蓬の頭の中を容易く苛む。狼狽えて力の抜けた全身を鉄柵が受け止めてくれる。夢芽の前からいなくなると決心した直後に既に死にかけていた。

「あ、の、……それ、聞いてないんですけど……え、ひよっとして上級生の人、とか、付き合っ、てた……？」

「プツ……違くて、当ててみせてよ」

「違？ あ、そう……じゃあ………親？ 親とか!! ちっちゃい頃、とうちゃんかあちゃんとかでしょ!」

「ハハッ……必死過ぎでしょ……そんなの普通カウントしないから」

「ええ〜……？　じゃあなんなんすかあ……焦らさないで教え……つば聞きたくねえ〜……」

縫りついた希望を悉く打ち砕かれ、悪趣味にも蓬を弄んで楽しんでる夢芽に対する『初めての彼氏』という漠然と抱いていた矜持すらをも挫かれて、蓬はくしゃくしゃに頭を抱えた。今日一日中身に着けたミイラの包帯が外れかけるのも気にならず、この身体ごと運河の藻屑になりたい羞恥心。恋人の交際歴に反発してしまっている器の小ささにも嫌気が差して、今すぐにもガウマの肩を借りたかった。

「じゃあ、教えない？」

漏らす息さえも笑みを含んで、夢芽は横目だけを覗かせている。怪獣の力で彼女の過去に触れた時垣間見た、心を閉ざす前の幼さが顔に出た、甘えるような声だった。蓬はそれに、抗えない。

「いつ頃かだけ、教えて下さい……」

自分が傷付くのは承知の上で、きりきりと胃を痛めながら蓬は溜息を吐いた。ただの唇と唇の万有引力にここまで落ち込む事があるのかと思いやられ、瞼をきつく閉じその耳に不都合な現実が届くのを蓬は待つ。

待った。

幾度となく車が通り過ぎる音がした。定期的に訪れる静寂は川の水が流れるせせらぎを引き連れて、夜の闇を穏やかにしてくれている。勿体つけた間に妙な安らぎを感じて、なんとなく、夢芽が口を閉ざしているのは悪意だけではないのだと、彼女のテンポに身を委ねる。瞼を上げて隣を見遣れば、今度は目だけでなく顔ごと蓬の方に向いて、鉄柵に頭を預けている夢芽の悪戯っぽい眼の輝きがあった。

「ちゃんと……蓬が、初めてだよ」

そう言っただけで彼女は、蓬の蟠りと世界の謎を易々と解き明かした。蓬は暫く呆けてその解答を咀嚼するも、サウナの後に冷や水を浴びせられたような寒暖差に、頭がついていかない。

「……へ？　えだつて、今さつき、初めてじゃないって……」

「……だからあ、蓬とのキスが、初めてじゃないって意味」

種明かしから一転、不機嫌な声色から情緒が乱れ、蓬は益々オウム

返し。

「初めてじゃ、ない？　俺と……夢芽が??？」

「そ」

夢芽は端的にそう言って、自分の唇を指先でなぞる。それからふと思いついたように蓬の方へ手を伸ばし、その長い爪でぶつからないよう、壊れ物に触るように蓬の口許に触れてきた。弧を描くようにそつと、上唇に人肌の温度を与えたしなやかな指先を、蓬は避けられない。夢芽の微笑と視線に囚われながら、触れられた跡を自分の指でそつとなぞる。自分でもはしたないと思いつながらも掌で口許を覆い隠し、あの高架下で感じた仄かな甘さが唇に残っていることに、蓬は遅れて気が付いた。

恐る恐る夢芽をまた見つめ返す。どこか得意げな顔つきで、爛々とした猫の眼を前に、蓬は一言、

「……………やらし」

「プツ——ハハハハハ！　蓬が遅いんじゃん……っ」

柵に腕を預け身体を浮かせ、しまいには身を仰け反らせながら、夢芽は全身で喜びを表現した。学校での彼女を知っている人間がこの場に居たら、十人が十人がぎよつとするだろう豹変っぷりで、たぶん彼女の中ではずっと地続きで、肩を震わせながら気恥ずかしさを逃がす一挙一動に、蓬は目を離せなかった。ほっぺはもうオーバーヒート気味だけど、眠っている間に奪われた初めての重みはもう、取り返せない。俺からしたかったのに——なんて意地の張り合いは、野良猫の喧嘩の如くヒートアップした。

「夢芽さあ……寝込み襲うとか、それはルール違反でしょ……!!」

「アハハッ、ルールばかり守ってたら、守れないものもあるかもよっ？」

「だから……それがファースト、キツ、キスとか……おかしいでしょ？　普通こういうの男子から……っ」

「プツふふ……キス噛んだ……」

「揚げ足取らない!!　もうわけわかんねえ……」

手玉に取られる蓬と調子づいた夢芽の肩と肩が、鉄柵伝いに近づき

合う。散々身動きしたせいも三角巾も斜めにずれ、元気なお化けは生気の限りを尽くし蓬にマウントを取っていく。

「蓬が私の事、大好きだって事だけは、わかったよ」

ここに来ても尚、その言動に胸の奥を鷲掴みにされてしまうのは、惚れた側の弱味としか言い様がないだろう。このペースでは負け惜しみになるのは明白なのに、答えない事がそのまま答えになる事を恐れ、蓬は言い訳を重ねた。

「それ、そっくりそのままお返しします。俺が言いたかったのは、夢芽の前からいなくならないってそれだけで……このノリで言わせないですよ……っ」

「蓬が勝手に言ったんじゃない。……蓬はさ、もしも目の前から私がいなくなったら、どうする？」

急に沈んだ声のトーン、隠れるようにまた顔を伏せて、今までの悪ノリを有耶無耶にする夢芽の問い掛け。その言葉に重みを持たせる、ただそれだけの為に今まではしゃいでいたのかと思える程激しい感情の落差は、そのまま夢芽が誤魔化していた不安の種だろうか。失う事で相手の価値を見積るほど、自分達はもう子供じゃない。振り回されるのは慣れっこでも、彼女への思いの丈まで、それ以上試されたくはなかった。

「だから、次そういうこと言ったら、」

怒るって言ったじゃん——と、言い切る事は出来なかった。

ピタリと、もう一度、ピンと張った彼女の長い爪先が蓬の唇を制した。

「ほら、

——冗談だよ？」

悪戯っぽく、添い寝でもするような角度で顔を傾け、蓬を覗き込む緑の双眸。

何かを待ち侘びるように薄く微笑った唇が、過ぎ去るライトに照らされる。

息を呑んで彼女を見つめて、鉄柵伝いに身を寄せつつ、蓬はゆつくりと足を下ろした。すると上っている分夢芽の方が目線が高くて、片手のみを支えにこちらに身体を向ける彼女の胸に飛び込むように、蓬の歩みは吸い込まれていく。

夢芽は俯き気味に、蓬は顔を上げて、まるで餌をやり合う親鳥と雛のように、お互いの唇を啄む角度で。

目を細め合いながら、吐息がかかりそうなくらい引き込まれていく。

シンと静まった夜の淵で、鼻の小突き合う音がした。二人にしか聴こえない音だった。

「……………へたっぴ」

「……………段差、あるから」

一緒に顔の半分を覆う二人の顔は、隠し切れないくらい紅くて、近くて。

「――」

むくれた夢芽が柵から片手を放し、バランスを欠いた身体が斜めに落ち行く。

目と鼻の先で起きた数センチ単位の落下を、受け止められるのは蓬に他なく。

倒れ合う二人の弾みに、外れかけていた包帯と三角巾が、宙に絡んで取り残された。

死者の夜が終わり、生者の日が巡る。

『よくできました』と、誰かが胸の上で囁いた。

beginning

2020年11月2日。土曜のハロウィンを終えて日曜を挟み、つがなく日常に戻る都立フジヨキ台高校の校内は、一通りのイベントを終えた活気の余韻を未だ引き摺っている。

1年3組所属、金石にとつてもそれは例外でなく、朝のホームルーム前から妙に騒がしいクラスメイト達の触れ合いは、恐らくは1―3プチ問題児こと南夢芽が密輸してきたゴールドなんたらのペイントシールの影響もあるのだろう。まるでクラス全体がはみ出し者になったかのようなアウェイな一体感は奇妙な高揚感をもたらし、カラオケで各々が自分を曝け出した後になって今更冷静になった者や、親睦を深めた者と立ち位置は多岐に分かれていた。

金石としてはどちらでもなくいつも通りの中立を取り戻したい所存で、大体教室の後ろから真ん中寄りの自分の席に腰を落ち着けスマートフォンを眺めながら、SNS経由の蘊蓄で11月2日はクリスマス教の日付だと死者の日にあたるらしいとの豆知識を読み流す。同じタイムラインでは顔も知らない誰かが、午後の東京は雨が降ると語っていた。一応の傘は用意してるものの、朝から気の重たい、そんな月曜日。

担任が来るまで適当に過ごしていると、突如教室の中が、どよめくような声に包まれた。

出入り口の方まで目を向ければ――教室に入ってくる仏頂面の南夢芽と、何やら右手で顔を覆っている麻中蓬が、クラス中の脚光を浴びている。

瞬時にして金石がその原因を理解できたのは、ひとえに麻中蓬を見続けていたからとしか言い様がないだろう。彼のトレードマークである黄と緑を半々に分けたヘアピンが、そのまま南夢芽の髪を右分けに固定していたのだから、あまりの自己主張っぷりにクラス全体が言葉を失っていた。

金石の手から、携帯が零れ落ち机の上で硬質な音を立てて転がる。

「見せつけてんなあ」とどこかでらんかの一周回って感心する声が室内のベールを破き、何も間違いないような顔をして南夢芽はガンガン入り込んでくる。所定の窓際の席に座る彼女と、俯きがちに顔を赤くしながら廊下側の一番前に座る蓬。彼が男衆に「お似合いじゃん」とからかわれる最中、担任の女性教諭の到来により南夢芽の奇行は流された。

金石はホームルームの有難い話を無視し机の下でスマホを弄ぶ。

登録ホヤホヤの『角井 鳴衣』宛に、音より早くメッセージ。

〈南さんヤバいんだけど〉

既読がマツハ。女子高生の反射神経を侮るなかれ。

〈あの子は大体ヤバイよ〉

〈彼氏のヘアピンして学校来てる〉

〈地雷コーデはまだ早いでしょ〉

〈おかあさんか〉

鳴衣に報告しながらもう一度南夢芽の方を窺えば、彼女はクラスの視線に耐えかねたかのように朝から机に突っ伏していた。羞恥のキヤパオーバーなのかただのマイペースなのか判断がつかない。ハロウインの夜に蓬と打ち上げを抜けて何かがあったのは明白で、わざわざアピールしなくてもいいのにと金石は心の底から思う。

やっぱりちよつと、仲良くなれそうにはないけれど、愚痴に付き合ってくれる返信の早さに、今はちよつとだけ救われている。

◇

狸寝入りをしながら、夢芽は窓の外を眺めている。

ホームルームの退屈な話は、一昨日のハロウインでフジヨキ台高校の制服を着た生徒達が物騒なタトゥーを頬やら手に施して集団で闊歩していたという巷の住民による目撃証言だった。

夢芽は当然、我関せず聞き流した。

窓の向こうは青い空。こんなに晴れているのに、どうやら午後は雨が降るらしい。

——早く降らないかな

今日の帰りは、蓬と一緒に、お揃いの傘をさしたい。

机に伏せながら髪を固定するヘアピンに指先で触れる。本当は傘みたいな色違いのものが欲しくて日曜にデートに出かけたけど、それは恥ずかし過ぎて無理だと蓬に断られた。だからオリジナルを奪い、もとい借り受けた訳だけど『そっちの方が恥ずかしくない？』なんて抵抗は聞かない振りをした。夢芽は満足一杯にヘアピンの感触を楽しみ、教室の隅に居る蓬の席に視線を送る。

蓬と目が合った。

頬杖をつきながら素っ気なく、それでいて柔和に目で笑む彼の方へ、蟹型のピースをそつと送る。

蓬も机の下で、同じ手の形を作ってくれた。

◇

山中暦は今日も今日とて家を出る。片付かないまま飛び出して溜め込んだ仕事を憂いながら、同級生の旦那の下で働く未来は、いつ終わるとも知れない。

目も覚めるような青空なのに、午後は雨が降るらしい。

折り畳みを片手に提げ、暦は今日も後ろ向きに前に行く。

◇

飛鳥川ちせは外で伸びをする。友達 of 怪獣と会いに、遠くの溪谷に通っていた習慣が、今の自分を形作っている。

偶にすれ違う学校の制服にちよつとささくれた気持ちを抱きながら、そんな自分に負けじと戦う。

どうやら午後には雨が降るらしい。念の為引つ提げてきた傘を、ふと思いついてちせは開いてみた。お気に入りのドクロマークを天に映かせて、雨のない空の下、ちせは傘をさす自由を謳歌する。

◇

とある高架下に逃えられた、風に捲かれたビニールシートに覆われた生活の跡を、一匹の野良猫が見つめている。

耳や頭の一部分だけに黒い斑模様をついた、それ以外は白い毛並みの野良猫だ。猫は日課のようにこの場所を訪れるけど、この先住民はもう久しく帰って来ていない。餌のお零れも貰えず、猫の記憶からあのノツポの記憶は薄れていく一方で、誰かが置いて行った紙袋や真つ白な仏花なんて、猫の食指にはとても引つかからない。

縄張り是最早猫のものであったけど、特段の価値があるわけではない。時偶地響きを立てる電車が怖い暗がりの下。猫にとってそこは最早通過点。いつも通りに横切ろうと川辺からやや離れて歩いていると——道行きに障害物を見かけて猫は足を止めた。

ただの帽子だ。

元はたぶん真つ白の、今は風に運ばれ地べたを転がり見る影もなく煤けて汚れた誰かの帽子。あしらわれた金のエンブレムも土塗れで、猫はその帽子を見るのが初めてはないけれど、当の昔に記憶の彼方。

避けるのは容易かったが、興味本位で猫は狩りの如く警戒心に身を引きながら、一度となく爪で引つ掛ける。時偶そよ風が吹いて帽子は草むらの方に転がり、猫はそれを追いかける。そんな事を何度も繰り返し、猫は川の側に来てしまう。草むらに埋もれた誰かの帽子は、猫には拾いようもない。揺れる水面を大海原のように見つめながら、猫は川辺に帽子と並んだ。

じつと川の流れに見入っている野良猫の頭上を、大きな人影が覆う。

革のジャケットとピンクの髪が印象的な、長身瘦躯の男だ。

男は、肘から紙袋を提げて、同じ右手に真っ白な仏花を持っている。汚れた帽子に目を落とし、男は口端を吊り上げる。

猫はちつとも気付かない。川のせせらぎ以外、誰の足音も聞こえない。

男が、落ちた帽子の方へ、細長い腕を伸ばして、

——どこからか、不如帰の鳴き声がした。

猫は咄嗟に振り返る。頭上を仰ぎ見るような角度で首を捻つても、目に映るのは冷たい橋の骨組みばかり。

気を落とすこともなく元の姿勢に戻りながら、猫は側に帽子がない事に気が付いた。

探し回るように首を傾げ、猫はすぐ様興味を失くす。

風に運ばれ地に汚され、毎日転がって躓いて、あの帽子は——きつと、今日は飛べたんだろう。

世界に降り注ぐ陽光は、一日の天気を約束している。

寄り道を終えた猫は、緩慢な歩みでその場を後にした。

誰もいなくなった橋の外で、何も無い一日が始まる。